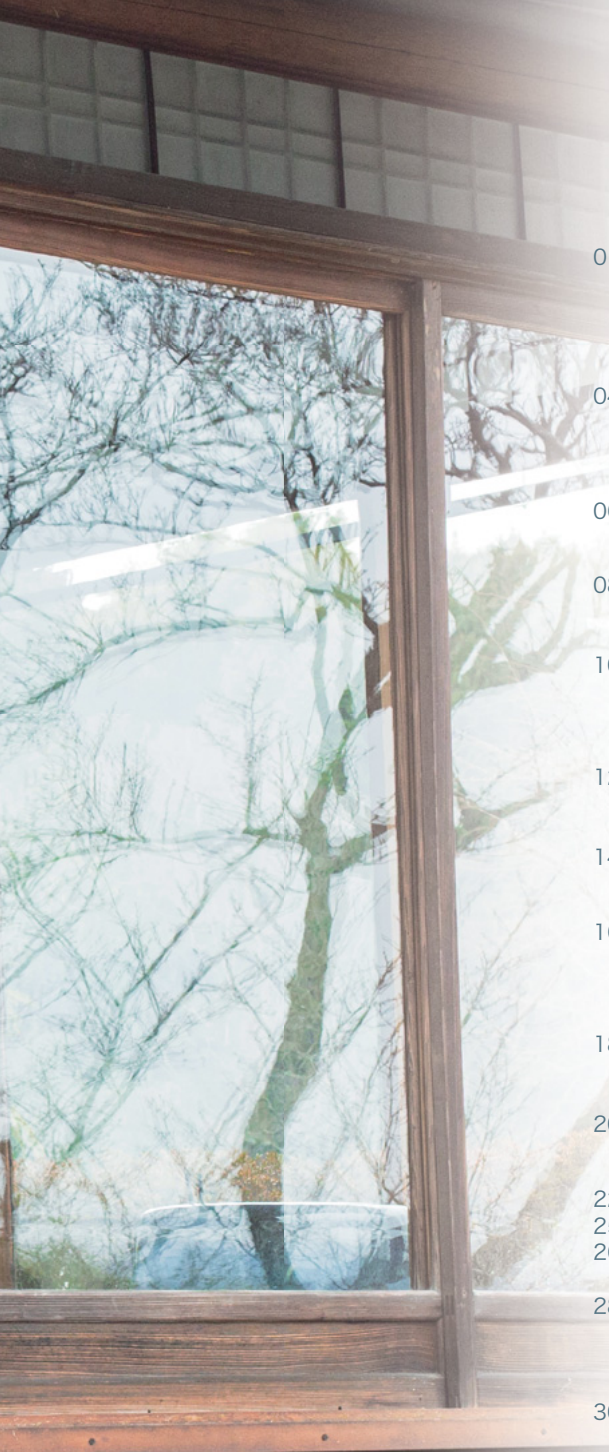
龍谷
Ryukoku

龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY

2013 No.75



龍谷 2013 No.75

CONTENTS

01 巻頭特集 学長対談
ベニシア・スタンリー・スミスさん×赤松 徹眞 学長
自然とともに、美しく生きていくために

04「青春クローズアップ」
龍魂編集室 第23期編集長 新谷 佳菜 さん
鬼編集長が切り込む！ 龍魂リニューアルへの挑戦

06 交響楽団第20代団長 辻野 萌 さん
意識を変えたら、音色が変わった

08 龍谷ミュージアム
春季特別展 平山郁夫 悠久のシルクロード

10 World, Unlimited
Souza Diogo さん
龍谷大学はもっともっと国際化ができるはず。もっと異質な人と付き合うことを意識してみては

12 藤岡 絢乃 さん
求められるのは、人の心をつかむ話術。しかも英語で。歴史ある英語スピーチ大会で3位入賞

14 村田 颯馬 さん
全く英語が話せないまま留学に挑戦！ そこでつかんだ人生のターニングポイント

16 Ryukoku Sports
スキー部 石井 翔子 さん
覚悟は決めた「卒業後もフリーで競技を続ける」めざすはユニバーシアード、ソチオリンピック

18 硬式野球部
野球部100年目の快挙！ 古本武尊選手、中日ドラゴンズへ

20 柔道部 小野 彰子 さん
前年は一回戦負け 一転、いきなり全日本の強化選手に でもこのチャンスにのって、自分を試したい

22 News & Topics
25 REC NEWS
26 龍谷大学の東日本大震災への対応

28 Education, Unlimited
国際文化学部 ジョナ・サルズ 教授
「真の国際人」を育むために―。2015年、深草キャンパスに移転する国際文化学部の取り組み

30 龍谷の至宝
建長版 往生要集
不安の時代に生まれた「極楽往生のための指南書」

32 龍谷人偉人伝
青木 文教
チベット文化に魅了された仏教文化学のパイオニア

34 RYUKOKU ACADEMIC EYE
35 第10回 青春俳句大賞

38 龍谷人
福島 暢啓 さん
愛すべき、ひねくれ者のアナウンサー

40 遠藤 由香 さん
美しいだけではダメ。表現者としての豊かさも求められるモデルの仕事

42 櫻木 厚子 さん
北欧の名門・フィンランド放送交響楽団で活躍するトランペッター

44 岡田 敏夫 さん
度重なる危機をともに乗り越えてきた 社員達こそが、会社の財産

46「BOOKS」新刊本を紹介
48 新学部長紹介
49 読者のひろば

自然とともに、美しく生きていくために

ハーブ研究家
ベニシア・Venetia Stanley-Smith スタンリー・スミス
対談
赤松 徹眞
龍谷大学学長

京都東山　三塔庵にて

かつては自然を愛で、自然とともに生きることに長けていた日本人。しかし、いつのまにか街にはビルが建ち並び、スーパーで野菜を買う生活に慣れ、土から離れた暮らしが当たり前になった。しかし物質的にどんなに豊かになっても、このままの価値観では本当に豊かな生活を送ることはできないということに、多くの人が気づきはじめている。そんななか、若い世代を中心に注目を集めているのが、イギリス人女性のベニシア・スタンリー・スミスさんだ。

京都・大原の古民家に住まい、地域の人々と交流しながらハーブや野菜を育て、自然の声を聞いて暮らすスタイル。そして環境にやさしく誰もが気軽に実践できる手づくりの生活は、NHKの番組で4年間にわたって放映され、今の時代にあった豊かな生き方の一つの手本として、多くの人々に支持されている。

一方、いのちの尊さや大切さを学び、地域連携を重視した教育に注力してきた龍谷大学は、2015年に新たに農学部を設置（予定）し、「食の循環」にかかる教学展開を通して、「食の安心・安全」及び「持続可能な社会」の実現を図る教育をスタートさせる。〝暮らしを見直し、持続可能な社会の実現を図る〟という全人類に課せられたテーマを、身近なところから実践しようとする大学の試みと、ベニシアさんのライフスタイルが共鳴する部分は多い。

イギリスと日本という二つの文化を通して、より良い生き方を見据えるベニシアさんが赤松学長と語る、日本の未来とは。

若い世代は生活を見直しはじめている

ベニシア　最近は大原に来て畑を借りて生活する若者が増えています。とくに25～35歳くらいの人は農業に興味がある人が多いですね。日本中でこういう動きが出てくると、この国の食料自給もあがってくるんじゃないでしょうか。

赤松　その世代は、大都市圏での就職状況がかなり難しくなったことなどから、価値観が変わりつつあるようですね。自分達の衣食住など生活の原点への関心が高まっているように感じられます。

ベニシア　エコなライフスタイルや食の安全に興味を持つのはとてもいいことですね。ただ、欧米では関心の高い問題が、日本ではあまり認知されていないことが気になります。例えば除草剤。環境や健康への影響が懸念されるとして一部の除草剤を使用禁止にしている国もあります。アメリカ人の友人に聞いたら「そんなことはみんな知っているよ」と言っていたけれど、日本では知っている人は少ないです。私は殺虫剤の代わりに除虫菊とヨモギと芥子を混ぜて防虫剤にして、草花や野菜などにスプレーしています。そうすると虫は来ないんですよ。危険性があるものは使わないという選択ですね。

赤松　インターネットなどで独自に情報収集している人もいますが、一般的には無関心な人が多いですよね。日本は同調社会と言われたりしますが、物事を決断する時に自分で決めず、周りの流れでなんとなく決めてしまう傾向があるように思います。

ベニシア　私の祖父はいつも「貴族は高潔でなくてはいけない」と言っていました。毎日の選択のなかで自分自身を偽らず、心を清らかに保つこと。今の日本はそういうことを忘れてしまっている気がします。

「いのち」を支える「食」

赤松　日本は〝寸分違わず正確なものを作る〟という工業製品の理念や管理方法を、農産物にまで適用してしまったんですよね。ここ20～30年の間にそんな風潮が広まったように思います。それまでは曲がったキュウリが普通だった気がしますよ。

ベニシア　でも外国から野菜が入ってくるようになって、みんな産地なんか気をつけて見るようになりましたよね。安過ぎるのは何かがおかしいんじゃないかってね。民間レベルでは流れは変わってきていますよね。

赤松　そうですね。消費者の食や環境に関する安全・安心志向の高まりを受けて、地域で生産されたものを、その地域で消費する「地産地消」という動きが注目されています。「健康的な食生活の実現」や「地域の活性化」など多くのメリットが「地産地消」にはあるのです。２０１５年に開設予定の農学部では、学生に田植え体験や収穫体験をさせ、自身の目で見つめ、見極め、未来への責任を持って選んでゆく消費活動ができるように、教育内容を検討しています。「いのち」を支える「食」のあり方を捉え、建学の精神に基づいた人間教育を通じて、本学独自の人間育成を図りたいと考えています。

私が一番大切にしているのは〝美しく生きる〟ということです

ベニシア　大原でも親子で畑を体験する試みをしていますが、参加者は多いですよ。子どもは楽しんでいますし、親もいい経験になります。一度体験すれば、また畑を借りてみようかなと思うきっかけにもなりますから。

龍大の新しい試み

赤松　ベニシアさんは大原の古民家を改築して住んでいらっしゃいますが、龍谷大学でも深草キャンパスの近くにある築１５０年の町家を改築して、イベントを開催したり地域の方と交流するスペースとして「深草町家キャンパス」を4月から開設します。京都では古い家を残すために、伝統的な木造建造物の保存及び活用のための条例ができ、この町家はその適用第一号なんです。ここを地域再生や国際

ベニシア・スタンリー・スミス　Venetia Stanley-Smith
ハーブ研究家。1950年、900年続く英国貴族の家に生まれる。1971年に来日し、英会話学校「ベニシア・インターナショナル」を設立。また、京都大原に移住、築100年の古民家住み、およそ200種類のハーブを育て、衣食住のあらゆるシーンに活用。その暮らしぶりは 2009年より NHK「猫のしっぽカエルの手 京都大原ベニシアの手づくり暮らし」で放映。ガーデニングやライフスタイルに関する著書も多数。

交流を展開する施設にしていく予定です。

ベニシア　それはいい試みですね。やっぱり昔の家はいいですよ。今の家はサッシで空間を密閉しますが、昔の窓は少しすき間があって風が入り、それで空気が循環する。それが心地よいのです。東京の高層マンションを見ると、100年後にはもう誰も住んでないんじゃないかと思います。その後あのコンクリートの固まりはどうなるんですかね。

赤松　日本の場合、1世代でしか物事を考えず、自分の世代だけで完結してしまいがちかもしれません。ベニシアさんのような長い歴史を有する家庭だと、自然と長い目線で子孫達の世代を考えるのかもしれませんが。近年の日本の場合は30年くらいのサイクルでしか物事を考えられずに終わってしまう。

ベニシア　イギリスは街をつくる時は必ず真ん中に庭や公園を作ります。みんなが散歩できる場所をつくるんですね。だからイギリスでは賑やかな駅の近くなんて誰も住みたくない。公園に近い場所にみんな住みたくて、駅から遠くなるほど家賃も高くなります。日本とは完全に逆ですよね。先日、講演会をしていて驚いたのだけど、毎日散歩している人いますか?と聞いたら200人中三人しか手を挙げなかったんです。人間は歩かなかったら病気になってしまいます。住む場所を選ぶ時には、散歩するところが近くにあるところを選んだ方がいいですよ。今、日本では三人に一人が鬱病と言われているそうですが、歩く人が増えたらきっと治りますよ。

赤松　日本も今後はそういう都市計画、ライフスタイルが求められますよね。

心を軽く、美しく生きる

ベニシア　日本をダメにした言葉は「便利」だと思います。イギリスにはコンビニエンスストアもあまりないですから。

赤松　でも日本では「便利」は今でもかなり有力な価値基準ですよね。

ベニシア　日本は戦争を通して自信をなくしてしまったような気がします。ハイスピードで近代化しようと焦って、古くからあるものの価値をおいてきてしまったのかもしれない。欧米はもっとゆっくりモデライゼーションしましたよね。でも私の番組がとても人気があるのは、手づくりの安心できる生活の大切さを理解し、自分の生活を変えようとしている人が多くなっているということ。ただ、原発問題を通して日本人はもう少し変わるかなと思ったけど、思ったほどは変わらなかったですね。日本人はのんきですよね。(笑)

赤松　大学もこれからは理想論ではなくもっと現実社会の問題と向き合っていかなくてはいけないですね。知識をつけるだけでなく、未来につながるものを自分で判断し、選び取っていく力をつけられる場所でありたいです。ベニシアさんは何か普段から心がけていらっしゃることはありますか。

ベニシア　私が一番大切にしているのは〝美しく生きる〟ということです。それは顔が綺麗になるのではなく、心が綺麗になるようなことをすること。良いことをすればみんな心が軽くなります。でもずるいことをすれば心は重くなる。自分の心を聞いて、できるだけ重たくなることはしない。それはそんなに簡単なことではないですが、とても大切なことです。

赤松　龍谷大学も「体感」できる農教育、異文化教育によって、技術や知識だけでなく建学の精神に培われた倫理観を備え持った人間を輩出することをめざします。

「体感」できる農教育、異文化教育によって、技術や知識だけでなく建学の精神に培われた倫理観を備え持った人間を輩出することをめざします

赤松 徹眞・あかまつ てっしん　龍谷大学学長
1949年奈良生まれ。龍谷大学大学院文学研究科修士課程修了、龍谷大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学。(文学修士) 1984年龍谷大学文学部講師、1987年龍谷大学文学部助教授、1998年龍谷大学文学部教授、2005年龍谷大学教学部長、2007年龍谷大学文学部長、2011年4月学長に就任、現在に至る。専門は日本仏教史、真宗史、近代史。

青春クローズアップ
CLOSE UP

鬼編集長が切り込む！ 龍魂リニューアルへの挑戦

「試合の裏側の努力を、魂のある記事で伝えたい」

龍魂編集室 第23期編集長
新谷 佳菜（しんたに かな）さん
文学部２年生　如水館高等学校出身

「今の〝龍スポ〟のままじゃつまらないです」と新谷編集長は一言でバサリと切り捨てた。23年の伝統を持つ龍大生による龍大生のためのスポーツ新聞『龍谷スポーツ』、通称〝龍スポ〟。年に4、5回の定期発行と号外で、龍大生に試合結果や選手の様子など様々な情報を提供し、龍大スポーツの振興に大きく寄与してきた新聞である。それがこの23年目に大きな岐路を迎えている。「伝統を変えていかなければ。もっと読者目線の新聞にしなければ」と編集長は燃える。目標は龍魂の認知率100％。発行したそばから新聞がなくなるくらいの人気を博したい。男子ばかりの龍魂編集室で女性ながら編集長に選ばれ、就任してひと月ですでに部員から〝鬼編集長〟と恐れられ慕われる、新谷編集長。彼女の改革はすでに始まっている。

悪しき伝統に喝！

まずは内容にメスを入れます。今までは試合展開がメインで、最後にちょろっと選手や監督の感想が入っているというのが、伝統として引き継がれたスタイルでした。それが読んでいると全く面白くないんですね。作っている私達すら、面白くないなと思いながら作っていたわけです。読者が知りたいのは当日の試合展開よりも、その裏側にある心情や努力。選手がどんな思いでここまできたのかだと思うんですよ。選手の近くでずっと見守ってきた私達になら、それが書けるはずです。次にレイアウト。文字量が多すぎて読みづらい。発行期間もなぜか試合の少ない冬期に固まっていて、リアルタイムな情報発信ができていません。今まではモヤモヤした気持ちを抱えながらも、「伝統だから」と良いものも悪いものもそのまま引き継いできました。私が上に立つことになってはじめに思ったのは、「自分達が一生懸命作った新聞を自分達の手で処分するのはもう嫌だ！」ということ。せっかく作った新聞が毎号、部室に山積みになって残るんです。それを捨てるときの悲しさと言ったら。こんなにがんばっているの

に龍魂の認知度は低く、体育局のなかでも知らない人がいるんですよ。そこで思い切って2年生三人で「いろんな伝統を変えていかないか」という提案をしたんです。そうしたら部員みんなが「やりたい！」と賛成してくれました。だから今期から龍魂はガラッと変わりますよ。私けっこう独裁者なんです（笑）。

体育局43サークルに対し、記者はたったの七人

龍魂には顧問がいません。なので他大学のように、アドバイスしてくれる人がいないんです。毎年おこなわれている報知新聞の学生スポーツ新聞コンテストでも、ずっと良い結果を残せずにきました。そこで、自主的に勉強に行くことにしたのです。大学内にもマスコミ関係の先生方がたくさんいらっしゃるので、アドバイスをもらおうと。先週は瀬田に行って新聞関係に勤めていた方から、より良いレイアウトについて教えていただきました。今後はカメラマンの方に良い写真の撮り方を教えてもらおうと思っています。今まで基礎が全くない状態で新聞を作っていたので、改めて基礎づくりをしていこうと、思い切って1月末の発行を一度休んでその期間を勉強にあてることにしました。

今後は部員ももっと増やしたいですね。現在部員はたったの7名。一方で体育局には43ものサークルがあります。人数が多かったときはたくさんの競技に取材に行けましたが、現在は九つの重点強化サークルを回るだけでも手一杯。野球なら明治神宮、スキーなら新潟など地方遠征への取材もあるので、試合が重なるときは休みなしでやっています。

情け容赦なしの赤入れ

でもこう見えて龍魂編集室はとても仲がいいんですよ。私が部室に入ると「佳菜さんきましたよ」ってシーンってなるときもありますけど（笑）。私をネタにしながらも、実は同期の男子達が改革を成功させようと裏で動いてくれているんですよね。また、この改革をスタートしてから一気に成長したのが1年生達。私達2年生が知らないところで毎週集まって、他大学やスポーツ新聞社の新聞を研究しているみたいなんです。私は気がつかないフリをしているんですけど（笑）。そんな部員達の努力が龍魂を支えています。日頃は照れくさくて言えないですけど、仲間達にはとても感謝しています。

また、記事づくりはみんなとても真剣。ダメ出しは先輩も後輩も関係なく、全員でおこないます。自分の出した渾身の文章にどんどん赤が入れられて真っ赤っかになって返ってきたときは、もう悔しくて悔しくて。翌日イチから書き直したこともありました。そうやってお互いに切磋琢磨しあうことで、新入生でもだんだん上手くなっていきます。ただ指導はしますが、自分の色は消してほしくないですね。記者によって個性がある方が新聞としては面白くなりますから、自分の書き方を極めていってほしいと思います。

時にはのめり込んで涙を流す、それが記者魂

記者は自分がプレーするのとはまた違った、スポーツの楽しさが味わえます。やるわけでもない、見ているだけでもない。一歩突っ込んだところから選手を応援できる。成績は悪かったとしても、ずっとがんばってきた選手を、ちょっとレイアウトを変えて大きく取り上げたり。取材していくなかで私達もその競技にどんどんのめり込んでいきます。以前、硬式野球部がリーグ優勝できなかったときに、担当していた前編集長が「悔しすぎて取材できなかった」と泣きながら帰ってきたことがあるそうです。その気持ちはよくわかるんですよね。私も女子バドミントンが西日本大会で初優勝したときには、写真を撮りながらもうずっと泣いてました。来年こそは！という思いをずっと聞いていたので、そんな彼女達を見ていたら本当に泣けて仕方なかったです。

取材しているときは目立たず、陰になって選手を追う私達ですが、その代わり新聞が発行されるとスポットライトがあたります。取材した人や新聞を見た人に「見たよ」、「嬉しかったよ」と言ってもらえる嬉しさは言葉にできません。そんな面白さをもっとたくさんの人に感じてほしいですね。

例えば、高校までスポーツをしてきた人が、もっと入部してくれたら嬉しいです。あらかじめルールも知っているし、感情移入していい記事を書けるはず。実は私も中学・高校と陸上をしていて、高校卒業後は実業団で走っていました。故障を機に引退しましたが、大学に入り直してまた陸上に関わろうと思ったときに、マネージャーで見ているだけでは悔しくなるに違いないと思ったんです。何か別の形で陸上部を応援したい。自分も参加できるような形で…そんな思いで入部したのが龍魂だったのです。龍魂の活動をしていると「あー青春してるな」という感じ。本当に毎日が生き生きしています。

次の4月号は、リニューアルした龍スポをお目にかけられるはず。新入生に配布する号ですから気合いを入れて作ります。新生・龍魂を楽しみにしていてください！

ジャンヌ・ダルクのごとく龍魂に颯爽と現れ、歴史を塗り替えていく新谷編集長。彼女の快進撃はまだ始まったばかりだ。その成果は、4月号にて明らかになる。乞うご期待！

意識を変えたら、音色が変わった

〝楽しいサークル〟から〝より深く音楽を追究する楽団〟へ

今年で創団20周年を迎える龍谷大学交響楽団。平成5年に音楽好きが集まって発足、当時は20名しか部員がおらず、全ての楽器パートも揃わない状態。オーケストラの醍醐味である大編成の曲など夢のまた夢で、アンサンブル曲を中心に演奏する楽団としてスタートした。それが現在は総団員80名。13パート全てが揃い、学内演奏会や地域の依頼演奏など、様々な場面で幅のある音色を奏でる立派な楽団へと成長した。20年の節目に団長を務める、辻野萌さんに定期演奏会を直前に控えた楽団の「今」を聞いた。

龍谷大学交響楽団第２０代団長
辻野（つじの） 萌（もえ） さん
法学部３年生　大阪学芸高等学校出身

オーケストラは瞬間芸術

たとえ練習の過程で演奏が良くできていても、本番が成功しなくては意味がない。それがオーケストラの難しさであり、面白さです。精神状態、楽器の状態が全てベストな状態で本番ができるか。ちょっとした緊張、体調で音色は変わってしまいます。前日の失敗を引きずって音が出なかったりもする。だから毎日の練習は、本番の成功率をあげるためにするわけです。そういう意味ではスポーツと同じですね。そしてオーケストラは一人が上手でも意味がない。全員のレベルと意識がピタリとあって初めて成功できる、団体競技なのです。そこが楽しみだけではやっていけない厳しい部分ですが、だからこそ本番舞台の上で「できた!」と思えたときの感動はとてつもなく大きい。一人の力では成し遂げられない、大きな大きな成果を得ることができます。

部員達の姿勢を変えた1年

今年は特に音楽面で、ものすごく真剣に取り組んだ一年でした。集団でやっていると、本格的に音楽を極めていきたいと考えている人がいる一方で、趣味的に楽しくやれたらいいという人もいます。もちろんどんな動機も大切ですし、全員が楽しめるようにまとめていくのが団長の仕事ではありますが、今年に限っては、音楽的にレベルアップすることを念頭に、かなり厳しい指導をしました。〝みんなで音を合わせて楽しいな〟というレベルと、一つの曲を全員の力を合わせて、深く豊かにつくりあげていく歓びでは達成感が全く違います。私は音楽を通じた深い歓びを、仲間達みんなで分かち合いたいと思いました。もちろん衝突もたくさんしましたよ。でも、ぶつかることは悪いことではありませんから、上からやれというのではなく、私はこういうことをやりたいから一緒にやろう、というスタンスで説得していきました。危機感がないと、なかなか真剣にならない部分もあるので厳しく言ったりもしましたが、いつの間にかみんな真剣に練習するようになってくれて。意識が変わるにつれて音も変わってきました。楽しかったらいいやん、という内輪のサークル的な意識から、より深く音楽を追究する方へ変わったことで、大きなレベルアップができたと思います。

今は2日後に定期演奏会を控えており、みんなピリピリと練習しているところです（本取材は昨年12月20日におこなわれた）。これまでの集大成ですから絶対成功させたいですね。私もこの演奏会をもって引退なので、思い入れは強いです。

OB・OGとともにつくってきた楽団

私達の楽団の特徴は、OB・OGとの関係が強いところです。卒業されてからも市民オケなどに参加されて楽器を続けている方が多いので、毎年かなりたくさんの方が定期演奏会にエキストラとして出演してくださいます。演奏会前には練習にも参加していただくのですが、仕事を早く切り上げたり、有給を使って来てくださっています。音楽面や楽団の運営面に厳しいご意見を頂くこともありますので、ちょっと怖い存在でもありますが（笑）。皆さん、団への愛が溢れていらっしゃる。ありがたく感じています。練習が終わってからはご飯を食べに連れていってくださったり、昔のお話を聞かせていただいたりして、社会人の方々と良い交流をさせていただいてます。このアットホームな雰囲気はずっと引き継いでいきたいものです。

団長らしくあるために、陰の努力も

私は高校1年のときに吹奏楽部に入部して、コントラバスをはじめました。大学でオーケストラを選んだのは、オケの方が弦楽器は目立つから。部のアットホームな雰囲気も好きでした。団長になったのは、入部したときにもっと楽しい団にしたいと思ったから。団長は推薦で選ばれ、全体会議で質疑応答をうけ、その後話し合いで選ばれます。団長になるのは大変だし、なってからはもっと大変です。団を運営するには指導の先生や客演の指揮者、他大学のエキストラや演奏会場の方など、学外のたくさんの方の協力が欠かせません。初めはプロの方や社会人の方とどう対応していけば良いのかわからず、お叱りを受けたこともあり、痛い思いをたくさんしました。でも今振り返れば貴重な社会勉強になりましたね。団員みんなの意見をまとめたり、前に出て話したりするのも仕事ですが、偉そうなこと言っても楽器がヘタだったら説得力もないですし、みんなもついてきません。だから陰ながら練習したり、個人レッスンに通ったり。裏の努力もいろいろありました。

そんなふうに大学生活のほとんどをオーケストラに捧げてきたので、引退したらぽっかりと心に穴があいてしまいそうです。毎回、定期演奏会の終盤には感慨深くて泣けてくるのですが、今回はこれでいよいよ最後。今まで必死でやってきたことの集大成が終わると思うと、「やっとか…」という思いと、ものすごく寂しいな、という思いが入り交じった複雑な気持ちです。

卒業しても夢は続く

後輩達には今年築き上げたものを元に戻さないよう、これからもがんばってほしいですね。私はこれから就職活動ですが、卒業しても楽器は続けるつもり。今は団の楽器を借りて演奏しているのですが、自分のコントラバスを買おうと思っています。私達の団の夢は、いつかベートーベンの第九やマーラーなど大編成の曲をやること。そんな夢をたとえ学生時代に叶えられなくても、卒業後にもOB・OGとして参加することで、また夢を追い続けられるんです。今はまだまだ部員が足りなくてできませんが、いつか実現できると信じてこれからも音楽を続けていきたいです。

取材後の定期演奏会では団員全員の気持ちが一つになった美しい音色が会場に響きわたった。より深く音楽を追究する楽団にこれからも注目したい。

春季特別展

平山郁夫 悠久のシルクロード

4月20日（土）～6月30日（日）

主催：龍谷大学 龍谷ミュージアム、日本経済新聞社、京都新聞社

シルクロードを行くキャラバン（東・太陽）2005年《平山郁夫シルクロード美術館蔵》

シルクロードを歩き、仏教を描き続けた画家の画業とその周辺を知る

幻想的な画風でシルクロードを描き続けた画家、平山郁夫。本展では精力的な取材をもとに釈迦の生涯や、仏教伝来の道をテーマにした作品を数多く遺した平山氏の代表作を展示するとともに、貴重な文化遺産の散逸を防ぎ、研究に寄与するために収集された「平山コレクション」のほか、日本で一時的に保管されている「流出文化財」なども展示。画業だけでなく、シルクロードに情熱を燃やし続けたその生涯までをも知ることができる。

龍谷ミュージアム　講師（学芸員）
岩井（いわい） 俊平（しゅんぺい）

菩薩半跏思惟坐像 ガンダーラ３～４世紀
《平山郁夫シルクロード美術館蔵》

画業の周辺から創作の原点を知る

深草学舎の顕真館に掲げられた巨大な陶板画が強く印象に残っている方も多いのではないだろうか。生い茂る大樹のなかで弟子達に囲まれて説法をする釈迦の様子が荘厳に描かれた『祇園精舎』は、仏教伝来の道筋を生涯のテーマとして多くの作品を遺した日本画の巨匠、平山郁夫氏の原画をもとに制作されたものだ。

２００９年に逝去した平山氏は、その62年にも及ぶ作画活動において、なによりも現地での感動体験を大切にしていた。シルクロードを中心とした取材旅行は１５０回を超え、その累積移動距離は40万キロにも及んだ。

「自らシルクロードを歩き、その感動をもとにして仏教を描き続けた平山郁夫氏の業績を顕彰する展覧会は、龍谷ミュージアムがオープンした当初からの悲願でした」と話すのは、本展の主担当者である講師の岩井俊平さん。

本展では、代表作である『入涅槃幻想』『シルクロードを行くキャラバン』などの大作に加え、本画の制作過程で描かれた下図（下絵）も多く展示される。また、シルクロードで記された取材ノートや素描、スケッチなども数多く展示され、平山氏の創作の原点を見ることができる。

また、平山氏がシルクロード研究に寄与す

るために収集した「平山コレクション」もあわせて展示。２０００年近い時を経た石仏や切子ガラス碗、刺繍裂など古代の遺物はいずれも当時の営みを現代に伝える。

なかでも平山氏が熱心に収集した「コイン・コレクション」は、シルクロードの歴史そのものと言える。

東西から多くの民族が行き交った古代のシルクロード。その文化の多様さから、支配者が交代した年代や当時の世相風俗などはいまだ多くの謎に包まれている。

オモテ

ウラ

カニシュカⅠ世金貨 ２世紀《平山郁夫シルクロード美術館蔵》

「シルクロードから発掘されたコインは文献資料がとても少ない、古代中央アジアを知る重要な手がかりです。当時、使用されていたコインには、その表に当時地域を統治した王が、裏にはその王が信仰していた神々が刻印されています。現在、史実とされている歴史には、直径わずか2センチほどの小さなコインの刻印から解読されたものも多く含まれています」

とくに、裏にブッダ像が刻まれた『カニシュカⅠ世金貨』は、この大きさのものでは世界でたった2枚しか存在していない貴重なもの。「仏教の保護者」として多くの経典に登場するカニシュカⅠ世の統治時代に仏教がどのような位置付けであったかを物語る一級品の資料だ。

これら歴史の遺物に平山氏はどのような風景を見たのか。画業の周辺からシルクロードに情熱を燃やした作家の、表情をうかがい知ることができる。

作品に託した平和への想い

平山氏はシルクロードをはじめとする、各地の文化遺産保護活動にも熱心に取り組んでいた。中国、カンボジア、アフガニスタンなどで内戦や政情不安によって世界各地へと散逸した流出文化財を収集して一時的に保管し、いつか本国へ返却するための準備をしていたのだ。

「文化遺産保護は、平山氏が画業とともに生涯をかけて取り組んだ活動です。今回展示しているガンダーラ仏やバーミヤーン壁画などの多くは、平山氏に保護されていなければ混乱のなかで失われていたかもしれません。また、なかには紀元前3世紀頃のものと考えられる『ゼウス神像左足断片』のように、様々な宗教が融和していた古代中央アジアの宗教史を読み解く、重要な手がかりとなる遺物もあります」

平山氏が掲げた「文化財赤十字」構想は、文化遺産分野での国際貢献のあり方を世に示した。晩年まで戦火のなかに失われる文化遺産を救済し続けた平山氏の活動は世界中の共感を呼び、逝去した今もアジアの研究者達の間ではもっとも有名な日本人として知られている。

平山氏は生前、本誌のインタビューにおいて、仏教を主題として描くことへの想いを次のように語っている。

「みんな生命があるのですから、見て安らぎが出るように、ただ装飾的に美しいということだけじゃなしに、そうありたいというのが将来の理想です」

中学3年で広島で被爆し、晩年までその後遺症に苦しんだ平山氏。シルクロードを歩き、仏教を描き続けることで平和への祈りを捧げたその生涯を、本展で感じてみてはいかがだろうか。

関連イベント

特別対談

5月11日（土）13時30分〜15時

「シルクロードから日本へ

〜平山郁夫の旅〜」

平山 美知子 氏（平山郁夫シルクロード美術館長）

樋口　隆康 氏（泉屋博古館名誉館長・京都大学名誉教授）

特別講演会

5月19日（日）13時30分〜15時

「平山郁夫と文化遺産保護活動」

前田 耕作 氏（アフガニスタン文化研究所長）

6月2日（日）13時30分〜15時

「平山コレクションに見るシルクロードの歴史と文化」

田辺 勝美 氏（浜名梱包輸送シルクロード・ミュージアム顧問）

その他

学芸員による展示解説などを随時開催予定

ゼウス神像左足断片 アイ・ハヌム 前３世紀
《流出文化財保護日本委員会保管》

World, Unlimited

Souza Diogo さん

理工学研究科電子情報学専攻　修士課程２年生
ブラジル・ブラジリア市　ガロア高校出身

子どもの頃から居合道や空手などを通じて、日本の文化や精神に親しみがあったというソウザさん。
ポルトガル語・英語・日本語を流暢に話し、「時々友達は私が留学生だってことを忘れてます」というくらい日本社会に馴染んでいる彼。その優れた国際感覚はグローバル化をめざしながらも、なかなかもう一歩を踏み出せない私達にとって学ぶべきところが多い。日本の外側と内側を自由に行き来するソウザさんに見えている日本とは、龍谷大学とは。
なおインタビューはもちろん、全編完璧な日本語で応えてくれた。

「多文化共生を展開する大学」を標榜する龍谷大学。
２０１５年４月には国際文化学部が深草キャンパスへと移転し、国際化へ向けた取り組みがますます加速する。高い志を持ったグローバル人材を育むため、言語や文化の壁を越えて世界と連携する取り組みが現在、各学部で精力的におこなわれている。

龍谷大学はもっともっと国際化ができるはず。
もっと異質な人と付き合うことを意識してみては

きっかけは宮本武蔵

私はブラジルにいながらも子どもの頃からたくさんの日本文化に触れて育ちました。一つは居合道。これは型だけを極めていくもの。ほかのスポーツと違って競争はせず、自分一人でやるところが好きでした。居合道をすると、ストレスの解消になるし、平和な気持ちになれるのです。また武道に向き合う姿勢や相手を尊敬することなど、日本の精神を学びました。そんなことから日本が好きになり、ある時『宮本武蔵』の小説を紹介されて読んだのですが（ポルトガル語訳）、それがとても面白くて。どうしても自分の目で日本という国を見てみたいと思うようになりました。

そんな思いを実現するため、高校生の時に東京の都立駒場高校に留学。1年間ホームステイをしながら、日本の学生達と一緒に勉強しました。その時の思い出がすごく楽しかったんです。日本の高校に外国人が来るのは珍しいようで、まるでスーパーヒーローみたいに歓迎してもらいました。そんな反応は外国ではないですから。

初めて見た日本は、当然宮本武蔵の世界とは違っていましたが、小説のなかで感じた日本人の精神は、いくつかの場面で感じることができました。例えばすぐ謝ること、礼儀正しいこと、平和な雰囲気。どれもブラジルとは異なる文化です。

留学の1年間はあっという間に終わってしまいましたが、みんなには「また絶対きます！」と言ってその時の友達とはずっと連絡をとっていました。

再び日本へ。龍谷大学へ留学

また必ず戻ってくるつもりで日本の大学のことを調べ、約束通り日本再来を果たしました。初めは大阪の日本語学校に1年、東京の専門学校で2年間、電気の勉強をしました。その頃、龍谷大学に通っている友人が龍谷大学を推薦してくれ、見学へ。瀬田キャンパスがとても魅力的でした。電子回路にもプログラミングにも興味があったので、電子情報学科の編入学試験を受けて龍谷大学に入学。2年生への編入です。

部活は興味のあった吹奏楽部に入部し、パーカッションを担当。それを続けるうちに音楽をもっと詳しくやりたいと思うようになって、3年生では電波と音波を研究する研究室に入り、コンサートホールの音の伝導をシミュレーションしたり、音色の解析などをおこないました。音波の研究で学んだことを意識しながら、放課後は楽器の練習。違う角度から音に触れることで、楽しさはさらに深まりましたね。

吹奏楽部の練習はほぼ毎日です。去年やっとコンクール・メンバーの選抜オーディションに受かって、私もコンクールに出場できました。全国大会まで進むことができ、本当にいい経験に。結果は銀賞でしたが、みんなで素晴らしい演奏をすることができたので満足しています。

外国を意識している人が少ない

日本人は仲良くなるまで時間がかかって、仲良くなると自分達だけでかたまる傾向があると感じます。日本人がもっと国際的になるには、積極的に外国人の友達をつくったり、異質な人と付き合うことを意識してみるといいと思います。私は最近、韓国人の友人がたくさんできたので、日本語にも似ているから勉強になるかなと思って韓国語の勉強を始めました。

龍谷大学も留学の制度や受け入れ体制はあるけれど、国際文化学部以外は留学生がとても少ないと感じます。海外留学する日本人学生がもっと増えるといいですね。1年遅れることを気にする人が多いみたいですが、人生の貴重な1年になるはずです。

就職も日本で。しばらくは日本に住みたい

大学卒業後は大学院へ進み、海川先生の研究室で太陽電池の研究をし、修士論文は太陽電池を作製する時の真空度と、できた太陽電池の特性の関係についてまとめました。カテゴリにしばられず、いろんな分野が学べるのが電子情報学専攻の良いところですね。その大学院も今年修了して、富士通に就職が決まりました。再び日本にきて今年で8年目。こんなに日本で生活しているので仕事もこちらでやってみたいなと。富士通ではモバイルフォンの開発をする予定です。

今はもう留学生としてではなく、普通の学生として日本に住んでいる感じがします。良い面悪い面も特に考えなくなって、日本人のように日本を見ることに慣れてきました。友達もたまに私が留学生だってことを忘れるそうです（笑）。

今後は日本の女性と結婚して日本に住んでもいいですね。今のところはできるだけ日本にいたい。両親が心配なのでいつかは帰国するかもしれませんが、もしブラジルに帰っても、すぐにエンジニアとして仕事ができるよう、これからもがんばりたいです。

特別研究の発表が優秀で、学部のトップ10に入って表彰されたこともあるソウザさん。授業に課外活動に、その活動範囲は幅広く深い。がんばる秘訣は？と聞くと「趣味を持ち、いろんなことに興味を持つこと。興味を持ってやれば勉強も楽しめるし、試験に必要なことだけでなく周辺のことも学べますから」さも当然だという顔で語ってくれたが、まずそれが難しいのである。異質なものに興味を持ち、飛び込んで追求してみる。そんな人材が今後たくさん育っていくことが期待される。

最後にもう一つソウザさんから学べるポイントが。馴染めなかった習慣や苦労したことありますか？との質問に「あると思うけど今思い出せない」との答え。このプラス思考も、グローバル人材には必要な素質に違いない。

求められるのは、人の心をつかむ話術。しかも英語で。
歴史ある英語スピーチ大会で３位入賞

昨年10月におこなわれた第47回天野杯全日本大学生英語弁論大会で3位に入賞した藤岡絢乃さん。天野杯は日本3大スピーチコンテストの一つに数えられ、スピーチの練習に日々青春を燃やす学生にとっては憧れの舞台である。大会では、全国各地の応募者のなかから、事前審査をクリアした8名（東京大学、明治大学、上智大学、青山学院大学、早稲田大学、獨協（どっきょう）大学、龍谷大学）が壇上に立った。関西勢では藤岡さんだけが最終選考まで残り、しかも首都圏の強豪校を退けて入賞した。

ふじおか　あやの
藤岡　絢乃さん
国際文化学部３年生　大津高等学校出身

話術の前に、書く力、まとめる力

私が所属しているＥＳＳサークル（Einglish Speaking Society の略）にはいろんな弁論大会の参加案内がきます。天野杯は英語弁論界では有名な大きな大会なのですが、最初はそうとは知らずに応募していました。アプリケーションカード（自己紹介）、原稿、自分のスピーチを録音したＣＤを送り、それをもとに事前審査がおこなわれます。原稿のテーマは自由なので、私は〝TABLE FOR TWO〟を題材に選びました。これは日本ではじまった開発途上国支援のシステムで、対象となる定食や食品を購入すると、一食につき20円の寄付金が、〝TABLE FOR TWO〟を通じて開発途上国の子どもの学校給食になるというもの。20円というのは、一人あたりの給食一食分の金額ですね。とても画期的な仕組みで、多くの企業や大学が参加しています。私は国際関係の中根智子先生の授業がきっかけで〝TABLE FOR TWO〟を知り、関心を持っていたので、これを伝えたいと思いました。

スピーチでまず必要なのは、話す前にわかりやすくまとめる力です。天野杯は8分間のスピーチなので、約７５０ワードの原稿を自分で書きます。私は貧困の現状を訴えながら、解決策の一つとして〝TABLE FOR TWO〟を提案し、解決に貢献していこう、と呼びかける内容でまとめました。今回の応募総数は50〜60通と多かったそうなので、事前審査通過の連絡を電話で受けたときは思わず「え！ほんとですか？」って聞き返してしまったくらい驚きました。

思わぬラッキーが入賞に結びついた

大会は埼玉の獨協大学でおこなわれました。当日は二つの種目があり、事前審査で送ったものと同じスピーチとそれに対する質疑応答、そして即興のスピーチ。即興スピーチはその場で与えられたテーマについて、15分のシンキングタイムの間に文章をつくり、3〜4分間話すというもので、出たとこ勝負の難関なのです。しかし、このとき私に与えられたテーマはなんと〝poverty(貧困)〟。〝TABLE FOR TWO〟と同じテーマ！、ちょうど語彙も事前知識もありました。思いがけない幸運のおかげで、心配していた即興スピーチを切り抜けられたのです。

大会の審査は、内容をどれだけわかりやすく話せたかだけでなく、話し方、抑揚などもジャッジの対象になります。注目を集めたいところで声を張り上げたり、あえて間を持たせるなど、人の心をつかむような表現を工夫しなくてはならないんです。私の練習法は先輩のスピーチを見て、いいなと思った話し方を盗んでやってみるんです。それを周囲の人に見てもらい、アドバイスをもらう。ここは早かったとか、声が小さすぎるとか、いろいろと批判してもらって、そこからまた磨いていきました。

初めての他大学の壇上、知り合いは一人もいないという完全にアウェイな状況でのスピーチはさすがに緊張しました。有名な大会なのでオーディエンスも多かったです。関東の大学のＥＳＳは部員数も多くて層が厚いですから、当然大会に出てくるのも選り抜きで、何回も大会に出ている方ばかり。私は順番が初めの方だったのですが、後の方はみんなすごく上手だったので早くに終わって良かった〜と思いました（笑）。そのなかで結果を残せたことは、我ながら本当に運がいいと思います。入賞がわかったときは驚きのあまり、思わず涙が出ました。

自分にだけスポットがあたる快感！

高校のときから英語が話せたらかっこいいなと思っていたので、大学では国際文化学部を選択。そしてやるからにはちゃんと話せるようになりたいと、ＥＳＳサークルにも入部しました。そこでドラゴンカップという新入部員は参加必須の暗唱大会に出場して初めて人前でスピーチをしたのですが、それが面白くて。壇上に立つと私にだけスポットライトがあたる。ジャッジする人もオーディエンスも見ているのは私だけ。まさに独壇場です。その静まり返ったなかで、私の声だけが響く快感。これが何より楽しいですね。注目されるのが好きな私にとってスピーチはぴったりだったのです。

英語力は週に2回サークルのメンバー同士で会話や発声練習、ディスカッションなどをおこない、それを繰り返すうちに力がついてきました。授業で習った表現をすぐにサークルで使い反復練習したことで、上達につながった気がします。先輩のなかには留学経験者や言語学を研究している方もいて、舌の使い方や発音についてもしっかりレクチャーしてもらえましたから、特に学外の英会話教室に行くこともなくスキルアップできました。

念願のオーストラリア留学へ

2月からオーストラリアのマードック大学に10カ月の交換留学に行きます。勉強が厳しい大学だそうで少し不安ですが（笑）。留学はずっとしたいなとは思っていましたが、サークルの運営メンバーになったので、2、3年生時はそちらを優先させてきました。3年生の12月に引退して、いよいよ就職活動かと考えたら、なんだか大事なことをやり残してしまった！と思ったんですね。サークルも授業もがんばって、すごく充実して過ごしてきたのに、なんだか心残りがあるのを感じて。このままじゃダメだ、後悔したくない！と思いきって両親に相談し、留学することに決めました。オーストラリア、ものすごく楽しみです。行くまでにもっと日本について勉強して、向こうでいろんな情報を発信してきたいと思います。

藤岡さんならオーストラリアでも臆することなく周囲の心をつかみ、スポットライトを浴びるだろう。留学から戻ってきたときの彼女は、国際人としてさらに一皮むけているに違いない。

全く英語が話せないまま留学に挑戦！
そこでつかんだ人生のターニングポイント

金銭面、選抜試験、休学など…留学したいけど難しい。そんな迷える学生達への救世主的選択肢が、龍谷大学には用意されている。BIE（ビー・アイ・イー）Program だ。これに参加したのが経営学部の村田くん。彼はこの留学で語学力だけでなく、人生の目標まで見つけたという。村田くんが留学を通して考えたこととは？

むらた　そうま
村田　颯馬さん
経営学部 3 年生　龍谷大学付属平安高等学校出身

BIE（ビー・アイ・イー）Program とは：
カリフォルニア州バークレーにある龍谷大学の海外拠点、RUBeC/ ルーベックを利用した独自のプログラム。英語学習、ボランティア活動、講義を組み合わせた留学で、5 週間のプログラムと半年間のプログラムの 2 種類があり、毎年約 120 名の学生が参加をしている。

アグレッシブなサウジアラビア人に圧倒される

バークレーではカルチャーショックの連続でした。なにしろ授業のスタイルが日本とは全く違う。発言とディスカッションのオンパレードです。生徒が主役で先生はオーガナイズするだけというのが新鮮でした。僕のクラスはサウジアラビアや中国から来た学生が多かったのですが、サウジアラビア人はこのスタイルに慣れていたらしく、初めから積極的に議論を繰り広げるんです。僕達日本人は普段発言しなれていないので、戸惑ってしまって。日本人ダメだなーと少し残念な気持ちになりましたね。僕は全然英語が喋れないまま行ったので、そのまま玉砕。全く聞き取れず、話すこともできず。最初の一カ月くらいはもう、帰りたくて帰りたくて、ホームシックになったりもしました。それが一カ月たった頃には、だんだんわかるようになってきたんです。それからは、むしろディスカッションスタイルの授業が、すごく楽しく感じられるようになっていきました。

また、バークレーの学生達の授業を見学できるプログラムがあってビジネスのクラスを見学したのですが、活発にディスカッションをしていて、もう空気が全然違うんですよ。みんなすごく和気あいあいとして楽しそうで。いつか自分も学生として参加してみたいと思いましたね。

サンフランシスコのホームレスに共感

ＢＩＥにはボランティアのプログラムも組まれており、僕はサンフランシスコのホームレスの支援を体験。食事を配る手伝いや、自分達でスカーフを編んで手渡しでプレゼントしたりしました。なぜホームレスになったのかインタビューもしたのですが、僕が話を聞いた方は、あまりコミュニケーションが得意ではなかったために、会社を辞めざるをえない状況になってしまったそうです。なんだか共感できる部分もあったりして。アメリカではユーモアがあって話し上手な人が評価されやすいところがありますが、当然そうでない人もいるわけです。自由なようでいて違いをなかなか認めてくれないという、アメリカの別の一面が見えた気がしました。

やる気のない日本の学生に逆カルチャーショック

充実した半年を過ごして帰国し、大学に行くと周りの人は授業中に寝たり、携帯電話を触ったりしている。今までは見慣れた風景だったはずなのに、なんだかショックでした。バークレーの学生は1日10時間くらい勉強し、ほとんどの学生が2年間で卒業単位を取得します。でも自分のためにみんな勉強を続けているんですよね。僕自身もＢＩＥに参加する前は消極的で、授業も全然面白くなくて、単位のために受けているという感じでした。でも、つまらないって思っていたのは自分に何か原因があったんじゃないか。初めからつまらないと思っていたからつまらなくなるんじゃないかって気がついたんです。それからは、授業を受ける姿勢が少し変わって、興味を持って授業に臨もうと思うようになりました。僕がＢＩＥで学んだ大きなことは〝自主性〟だったのかもしれません。

日本文化を知らないと恥ずかしい

帰国後、龍大にきている留学生に「なんで日本人ってお祭りの時に浴衣を着るの？」と質問されたことがありまして、その時僕はその質問に答えられなかったんです。それがめっちゃ恥ずかしくて。もっと日本の文化を学ばなくては、と思い始めたんです。でもどうやって勉強すればいいかわからない。そこで留学生の人も一緒に日本文化を勉強する場をつくればいいと思いつきました。教えるよりもともに学ぶ。それなら楽しいですし、お互いより勉強になりますから。そんなアイディアがきっかけになって昨年の夏頃に『ＷＩＮＫ』という団体を立ち上げました。親しみ、親切と言う意味の英語です。友達や留学生に声をかけたら、思ったより反応が良く、現在メンバーは日本人が30名、留学生が20名くらいです。月1回イベントを開催していて、最近では八ツ橋づくりをみんなで体験しました。ほかにも日本の文化とは何ぞや、というテーマでみんなでディスカッションをしたりも。いずれは京都市内の小学校で、日本や外国の文化を紹介したいと考えています。最近は小学校でも英語教育に力を入れていると聞くので、何か力になれればいいな、って。

夢はアメリカで起業

帰国してから英語をすぐに忘れてしまう人も多いようですが、僕はＢＩＥで出会った友人と毎日スカイプで会話をしています。もう日常会話くらいは大丈夫ですよ。卒業後は、アメリカのコミュニティ・カレッジ（2年制大学）に進むことにしました。就職活動もして1社に内々定もいただいたのですが、やっぱり留学したい気持ちが強くて。ＴＯＥＦＬのスコアで試験をパスできたので、ロサンゼルスのコミュニティ・カレッジに2年間通うことが決まっています。将来は会社を経営してみたいですね。親が食品関係の会社をやっていて、もともとそれを継ごうと思ってはいたのですが、やっぱり自分でやってみたいと思い始めて。できればアメリカで会社をやってみたいです。

彼のように当初は全く英語を話せなくても、勇気とやる気次第でこんなにも国際的な人に成長できる。ＢＩＥを経て交換留学の選抜に受かった人もいるそうだ。恐れずに飛び込んでみれば、必ず何かをつかめる。そのことを村田くんは証明してくれた。取材後は『ＷＩＮＫ』の仲間達と初詣でに行くという。未来へ向けて力強く歩き出した、楽しそうな姿を見送った。

覚悟は決めた「卒業後もフリーで競技を続ける」めざすはユニバーシアード、ソチオリンピック

在学中にどんなに輝かしい成績を残したとしても、卒業後もスポーツを続けられるのはごく一部の選手だけだ。なかでもそれで食べていけるのは、ほんの一握り。そんななか、スキー部クロスカントリーの、石井翔子選手はあえて就職せず、チームにも所属せず、フリーとしてたった一人で競技を続けていくことを決めた。昨年の全日本選手権では4位入賞、全日本学生スキー選手権でも4位。またバイアスロンでも頭角を現すなど、ここ数年でその実力をどんどん伸ばしている石井選手。そんな彼女でもフリーでやっていくことは、精神面でも資金面でもかなり厳しいはずだ。しかし、そんなことはやる前からわかっている。それでもやりたい―。そこまで彼女を突き動かすものとは一体何なのか。今年正月明けて早々の1月7日、スノーホワイトがまぶしい札幌・白旗山競技場にて、世界選手権の代表選考を兼ねた試合に出場している石井選手を訪ねた。

とてつもなく苦しくて楽しい競技

クロスカントリーなんて雪のなかで全速力で走るわけですから、もうはたから見たら何が楽しいんだと思われるでしょう。実際とてつもなく苦しい競技なんです。自分でも「何が楽しいんだ、何でこんなことやってるんだ」と、走りながら自問自答するんですけど（笑）。でもこれがまた奥が深い競技で。スキー板の使いこなし、ワックスの塗り方一つで勝敗が変わり、プレイヤーの技術力だけではままならない面白さ。それに美しい自然のなかでプレーする気持ち良さ、何よりこの辛さを分かち合える仲間達。やればやるほど楽しくなってきて、スキーの魅力にはまってしまいました。

スキー部
クロスカントリー
石井 翔子（いしい しょうこ）さん
経営学部４年生　勝山高等学校出身

私は福井県出身ですが、福井県はそこまでクロスカントリーが盛んではなかったので、中学・高校ともに冬だけスキー部に所属し、夏はほかの部活を掛け持ち。本格的にスキーをやり出したのは大学に入ってからです。なんとなくスキーをしていた私にとって、龍大スキー部は衝撃でしたね。先輩後輩関係がきっちりしていて、先輩達の指導も厳しい。下級生がやるべき仕事もたくさんあります。1年生の時は慣れない大学生活と両立せねばならず、とてもしんどい期間でした。でも、その期間に経験したことはとても大きい。辛い時期を乗り越えた人とそこで挫折した人ではとてつもなく大きな差が出ると思います。今では先輩達は私のために厳しく言ってくれていたんだと思えるし、スキー連盟の方や他大学の方、いつもお世話になっている宿の方など、たくさんの方と出会うなかで社会人との付き合い方も知ることができました。大学でスキーをやっていなかったら、技術はもちろん人間としても成長できなかったでしょう。

スランプ知らずの秘密は「良い意味でテキトー」

昨年は全日本学生スキー選手権大会や全日本学生チャンピオン大会で入賞、また年末の全日本の大会は一般で10位に入賞できました。日本のトップ選手も出場している大会だったので、そこで成績を残せたのは良かったですね。ちなみに今日の試合は散々でした(笑)。もうちょっといけると思ったんですけど、練習不足でした。でも私は成績が悪いと落ち込んじゃうとか、練習がきちんとできないと不安になるとか、そういうことがほとんどないんです。いい意味でストイックすぎないというか、考えすぎないというか、自然体。良かったら良かった、悪かったら悪かったで、スパンとそのまま受け入れて引きずらないんですね。プレッシャーもむしろ原動力になるし、スランプもないですね。私の場合、いい意味で「テキトー」さがプラスに出ているんですよ。ただ、「テキトー」すぎるっていう欠点もあるので(笑)。それが行きすぎないように、目標を明確にすることを大事にしています。昨年あたりから今日は何位に入賞するぞとか、こんな走りをするぞ、と意識して目標設定をはじめたら、自分でもびっくりするくらい成績が伸びてきました。

今やめたらもう2度とできない

3月で大学を卒業し、今後は1年間フリーで練習をしていくことに決めました。実はいま日本には、フリーの選手というのはほかにいません。スキーでごはんを食べていくのはなかなか厳しい世界ですから。もちろん不安はありますが、今しかできないって思うんです。今やめてしまったら、5年後10年後やりたいと思っても絶対にできないんですよ。今この時しか続けるタイミングがない。だったら、やれるところまでやってやろうと思っているんです。

1年間自分で自分をマネジメントしてやっていくのは大変でしょうね。海外の大会に出場したり練習するための資金問題など、不安材料もたくさんあります。でもきっと1年目が一番大変なので、そこを乗り越えたらなんとかなるかな、っていう「テキトー」な考えでいこうかと(笑)。ダメならまた次考えればいいことですし。

実はスキーを続けながら働いてもいいよと言ってくださった就職先もいくつかありました。このご時世にありがたいお話です。でも私のこの性格ですから、自分のやり方で好きなようにやった方が上手くいくような気がして。仕事とスキーと中途半端になるのも嫌だったので辞退しました。親は「好きにすればいいよ」とは言ってくれていますが、4年間大学に通わせてもらい、ましてお金のかかるスキーまでやらせてもらったので、できればこれ以上心配も迷惑もかけたくはない。でも、それでもスキーがしたい。その葛藤ですね。だから少しでも負担にならないように、自分で自立してやっていきたいと思っています。そんな状況でいかにトップでやっていけるか。挑戦です。

めざすはユニバーシアード、オリンピック

来年はイタリアのトレンティーノでユニバーシアード大会があります。すでに出場条件は満たしているので、その選考に残ることをめざし、両親をイタリアに連れていってあげたいのです。それが今できる私の一番の恩返しだと思っています。

フリーでやっていくと決めてから、監督をはじめ周囲のたくさんの方が情報を提供してくださったり、自分のところで働かないかと手を差し伸べてくださいました。見守ってくださるたくさんの方とのつながりなど、この4年間で築いてきたことはとても大きい。それに自信が持てるから、これからも乗り越えられるような気がするんです。あとは自分の力次第。行動力を武器にしっかりやっていきたいです。

一番厳しい道を自分で選択した石井選手だが、1年後きっと彼女は笑っているはずだ。そう確信できる力強いコメントをくれた。その力強いコメントどおり、2月末に開催された全日本学生スキー選手権大会では見事優勝を果たした。北海道や新潟など日本各地を転戦し、試合に出場する。男勝りに豪快で、マイペースに自分の道を突き進む姿を見ているとみんな応援せずにはいられない。そんなところがこの選手の魅力でもある。自分と向き合い、世界をめざす石井選手はこの1年で大きく成長するだろう。たくさんの人に揉まれ助けられ、大きくなっていく彼女にまた会ってみたい。

ふるもとたける
古本 武尊 選手
社会学部社会学科13年卒業。福岡大学付属大濠高校出身。外野手。昨年の全国大会では首位打者を獲得。大学ナンバーワンスラッガーと評される。昨年10月に中日ドラゴンズからドラフト3位に指名。

野球部100年目の快挙！ 古本武尊選手、中日ドラゴンズへ

昨年で創部100周年を迎えた硬式野球部。この記念すべき年にふさわしいビッグニュースが、古本選手の中日ドラゴンズ入団である。昨年は関西六大学野球春季リーグで優勝し、全国大会でもベスト4と絶好調。さらには古本武尊選手が最優秀選手と首位打者を、杉上諒選手が最優秀投手を受賞するというミラクルな1年となった。また11年間監督を務めた椹木監督が定年により勇退、山本樹コーチが新監督へ就任し、新たな野球部が始動する。喜ばしいニュースにさぞかしめでたいムードであろうと瀬田のグラウンドを訪れると、どうやら雲行きが怪しい。そこで繰り広げられていたのは、プロの厳しさを知り尽くす新旧両監督による、古本選手への苦言の連続ノック！親心ゆえの厳しいアドバイスをしんみりと聞く古本選手、というなんだか微笑ましい構図のなか、100周年という節目にその名を残すであろう、3人の野球人の思いを聞いた。

硬式野球部

この子達と野球ができたことこそ、監督冥利に尽きる

椹木　この10年間は、全国大会に出場しても勝つことができなかったんです。それが最後の最後にみんながブレイクしてくれまして、全国ベスト4という勲章を持って引退することができました。開会式のときにキャプテンの鈴木紳吾が『監督のラストイヤーなので全力でがんばります』と言ってくれたんです。これは僕の心に響きましたね。〝監督冥利に尽きる〟というのは優勝したときに一番言われますけど、僕の場合は選手達が『椹木監督で良かった』と感じてくれたとき。僕もこの子達とやれることが幸せや、と心から思えました。

11年目にして初。バッターでプロへ

椹木　僕が監督中に龍大からプロに行ったのはピッチャーばかりで、バッターとして送り出すのは古本が初めてです。この子は入部したときからプロになれる力量は持っていました。ただ当たれば飛ばしますけど、技術はまだまだ不足していて当たらないと空振りばっかり。3年生までの全国大会で8打数7三振していますからね。それが今では5割を打つようになりました。後は気持ちの部分で〝謙虚に素直に〟というところが不足していた。でもこの1年でだいぶ良くなってきました。

古本　僕は1年生のときから誰にも負けないという気持ちがかなり強かったので、ある意味、調子に乗っていた部分があったんです。練習に遅刻することもよくあって、そういうときはかなり怒られました。椹木監督の目つきが変わったときは怖かったです（笑）。でも学年が上がるにつれて、監督やコーチに指導してもらって、素直な気持ちが大事なんだなと改めて感じさせられました。

山本　古本を怖がらせたいわけじゃないですけど、これからプロになって、きっと行かなきゃ良かったと思うことだって一度や二度ではないはずなんです。どんな指導者に巡り会うか、日々どんな姿勢で過ごすかが大事。地獄に堕ちるのは一瞬なんです。

想像を絶する、プロの厳しさ

山本　今思えば僕もプロなんて、何も考えていなかったから行けたんです。今のプロ野球界で一般社会での60歳までの年収を稼げる人間が何人いるか。一千万超えた額で何年かプレーしても、サラリーマンの生涯年俸には遙かに及ばないわけで、リスクを考えたらギャンブルもいいところです。僕は3年く

やまもとたつき
山本 樹 新監督
89年龍谷大学経営学部入学。93年にヤクルトスワローズ入団。左のセットアッパーとして活躍し二度の日本一を経験。05年に引退し、09年より龍大硬式野球部コーチとして就任。12年より監督に就任。

さわらぎひろし
椹木 寛 前監督
65年に大谷高校から甲子園へ出場。高校野球の監督などを経て02年に龍大硬式野球部監督に就任。11年の監督期間にリーグ戦13回優勝、全国大会に9回出場。龍大硬式野球部の黄金時代を築く。12年に退任。

らい1軍と2軍を行ったり来たりで辛い時期がありました。そんなときは、例えば飛行機で移動中に、自分は2軍でエコノミー、1軍はビジネスクラスという差をつけられて、屈辱的な思いをするわけです。情けない気持ち、腹立たしさ、そういうものを抱えながらプレーし続けないといけない。でもそういう地獄のような辛い世界に追い込まれたことが、今となっては良かったと思うんです。

古本　生半可では絶対に通用しないと思うので、気合い入れるところは入れて、抜くところは抜いて、メリハリをつけてがんばりたいです。最初はがむしゃらについていくしかできないと思うので、それだけ考えています。

山本　プロに行ってみんなに揉まれ、叩かれて叩かれて強くなります、人間的に大きくなれます。最後の最後に笑えればいい。だから僕は古本には成功しにいくというより、いっぱい失敗してほしいです。

「僕は心配なんです」（山本新監督）

椹木　古本は昨年8月に練習中に目にボールを当てて、網膜剥離になったんです。一時は野球をできないと医者にも言われたそうで、私も本当に生きた心地がしませんでした。

古本　あのときは僕ももうダメだと思って、次どうしようかと考えていました。

山本　お前はなんぼでもミスしよるけど、懲りひんからなー。ボールのほうが悪いくらいの勢いですから（笑）。プラス思考の使い方を間違えたらあかん！だから僕は心配なんです。プロが怪我したらクビになりますからね。

古本　はい。今ではもうすっかり良くなりました。

椹木　今まではこんだけ言われたらふくれてましたよ。俺はできるんやと思ってたからね。でも笑って済ませられるようになってきたっていうのはそれだけ成長したんやね。

古本　いや、言われて当然です。はい。

龍大の自由な雰囲気だからこそ伸びた

椹木　古本は龍大に来て正解だったと思います。ある程度好きにさせたことが、この子の野球観に合ったんじゃないですか。しごかれてしごかれてやってきた人もいるけど、ある程度自分で考えさせてくれる環境で伸びる人もいるわけで。これからはそういう野球じゃないとダメだと思います。

山本　僕も龍大を選んだ理由の一つはあまり干渉されないというところ。他大学からも誘いはありましたが、そこでは自分は伸びないのではないかと思った。やっぱり自分のスタイルを貫ける環境が自分にとってはプロへの近道になるという感覚があったんです。だから僕は自分でできている子にはあまり指導しません。ヒントは言うけど答えは言わないのです。

椹木　監督の一番のミッションは勝つことですが、それと同じくらい育てることが大事です。最近体罰の問題なんかもありますけど、選手と監督の仲というのは夫婦仲と同じでね。ちゃんと把握してキツいことも言いながらも信頼関係がないとできません。慕われる監督でなくては、指導者としてはダメなんです。山本監督も古本も龍大の新しい歴史を刻むわけですから、がんばってほしいですね。

山本　椹木監督の全国ベスト4という置き土産があって大変ですけどね（笑）。こっちからしたら大迷惑ですよ！春も秋も最下位くらいで終わってくれていたら楽だったんですけど（笑）。それを上回る成績をとるにはもう、全国大会の優勝と準優勝しかないわけですから、あらゆる部分で精度を上げなくてはなりません。また育成という点では、社会に出て通用する学生を育てたいと思っています。部員のうち将来野球を続ける人間はほんの一握り。野球以外の人生でどれだけ社会へ出て通用するか。まず人間をしっかりとつくる指導をしていきたいです。

古本　龍大では本当にいい指導者に恵まれたと思っています。私生活の大切さも学んだし、山本監督には技術だけでなく試合での駆け引きなど実践的なことを練習の帰り道などにたくさん教えてもらいました。今、不安なことは何もないです。思いっきりやってみるだけです。

厳しい顔で古本選手に喝を入れる山本新監督と、父のような目で見守る椹木前監督。猛者が跋扈するプロの世界へ踏み出した古本選手にとって、こんなにも熱く見守ってくれる恩師達がいることはどれほど心強いかしれない。中日の背番号66番（前中日落合博満監督の背番号）を背負って、いよいよ古本選手はバッターボックスに立つ。この心配症の先輩達のためにも、ぜひとも大活躍してほしい。

前年は一回戦負け 一転、いきなり全日本の強化選手に でもこのチャンスにのって、自分を試したい

2012年11月10日（土）・11日（日）千葉ポートアリーナにおいて開催された講道館杯全日本柔道体重別選手権大会女子57kg以下級で、大躍進の5位入賞を果たした小野選手。これにより、全日本柔道連盟B※強化選手に選出され、全日本の強化合宿への参加や海外遠征ヨーロッパオープンソフィア大会（ブルガリア）出場のチャンスを得た。講道館杯は、実業団、警察、大学などの全国規模の大会で優秀な成績を収めた選手達が、男女7階級の体重別日本一を争う。と同時に、来年8月にブラジル・リオデジャネイロで開催される、世界選手権大会の日本代表選手第一次選考会も兼ねた、重要な位置付けの大会である。

柔道界にあらわれた、無邪気な期待の新星。3年後、7年後のオリンピックでその活躍を見るのも、夢じゃないかもしれない。

本人はびっくり、強化選出

全日本大会で5位だというから、きっとこれまでも華麗な経歴と実績、自信のある選手なのだろうと思っていた。しかし会ってみると「前回の同大会では一回戦で負けていたのに、今回、急に強化選手に選ばれたんで、自分でもまだ目標も何も、どこまで行けるのかもわからないんです」と、とても謙虚な口調。柔道着から着替えた小野さんは、柔道選手だとはわからなくなってしまうぐらいの、かわいらしい女子学生だった。

「講道館杯でもし3位に入っていたら、東

柔道部

小野（おの） 彰子（しょうこ）さん

経営学部２年生　八幡浜高等学校出身

※B 強化＝毎年度、シニア各階級8名前後の選出。ちなみに A 強化は 1 名だけのオリンピックレベル。

（この取材は海外遠征前の2012年12月におこないました）

京グランドスラムという国際大会に出られたんですが。3位決定戦のときは、そこまでたどり着けたことが嬉しくて燃え尽きてしまって、気持ちが足りなかったみたいです」と強化選手入りを決めた大会を振り返る。

「直前の全日本学生体重別選手権大会では一回戦負けでしたが、関西大会で優勝していたので、その枠で講道館杯に出場できました。学生大会で日本一になることを目標にしていたので、その敗退でとても悔しい思いをしました。だからこそ講道館杯では挑戦者の気持ちで挑むことができました」

じつは一昨年も同大会に出場したが、一回戦の開始一分で負けてしまうという経験をした。それで手強い相手が多いことはよくわかっていたので、今回は、負けてもいいから思いきりやろうという気持ちで望んだのだという。初戦は全日本強化選手。そこで大外刈りで一本勝ち。自分では想定外の初勝利をおさめ、気持ちがあがってくる。2

回戦はジュニア大会2位の選手。高校生には負けられないという気持ちで戦った。内股で一本勝ち。そして進んだ準々決勝。全日本強化選手と中盤まで互角に戦い、しかし一瞬の隙を突かれ足技で一本負け。だがその後の敗者復活戦で、また得意の内股の一本勝ちで3位決定戦へ這い上がる。3位決定戦では、さらに手強い全日本強化選手で世界ランク29位の選手。ここではなかなか自分の組み手にならず、優勢負けとなった。だが5位入賞という結果を残し、全日本強化選手Bに選ばれた。

女子2名ほどだった高校柔道部

小野さんは愛媛県の西の端、八幡浜高校の出身。小学校3年生の頃から、いとこの影響で柔道を始めた。しかし高校の柔道部は人数が少なく、女子は2名だけ。遠征の経験もほとんどないまま、大学進学で初めて地元から離れ、たった一人で新しい環境に行くことに。進路を考えるにあたって、何気なく続けてきた柔道に対して、初めて自分の意志で「自分にはこれしかない、力を入れてやってみよう」と思った。そして恩師のすすめで龍大へ。ここでめきめきと力をつけ、頭角をあらわしていく。

「ちゃんと女子がいて（笑）、合宿であちこちに行き、強い選手とたくさん対戦できることが良い刺激になっています。大学で知人もいない全く新しい環境にやってきて、世界が変わりました。まさか海外に行かせてもらえるようになるとは、思ってもみなかったです」

小野さんの大学での柔道ライフは、毎朝6時50分からの朝練から始まる。寮で当番が作る朝ご飯を食べ、授業へ。授業が終わると練習。練習後、学食で管理栄養士さんセレクトの夕食を摂り、寮に帰るのは夜10時頃。そして夜11時には点呼・消灯だ。練習の休みは日曜日だけ。

「練習はしんどいです！食べることと寝ることぐらいしか楽しみがないです（笑）。ほかの女の子と飲み会とか行ってみたいな、いいな～って思っちゃいますが、このライフスタイルだと難しいでしょうね（笑）。」

地元で勝利を喜んでくれる人がたくさんいることが、原動力

「試合のときはいつも緊張して顔面蒼白です」と小野さん。特技はキレのある内股。一本を取りに行く柔道だ。柔道部の堀田監督いわく、小野さんは姿勢が良く、技が決まるときはとても美しい。

「今までは自分が無名の挑戦者であり、相手が自分のことを知らないからやってこれました。それが変わってきて、今は前もって対策される試合も増えてきています。そんなときも揺るがずに、さらにハイレベルの試合でも、安定して得意技で勝てるようになりたい」と今後に向けて身を引き締める。今年、全日本強化選手として、初めての海外遠征も入ってくる。どれぐらいやれるのか、自分でも試してみたい気持ち。

不思議なことに彼女からは、抜きん出た強い闘志や目標意識が溢れ出ているとか、そういう雰囲気を感じない。単に、楽しいことを素直に続けてきて、自然と実力が結果に出るようになってきたという感じ。そんな彼女の原動力は、どうやらふるさとの人々の存在にあるようだ。愛媛から離れてなお、幼い頃からの恩師達が自分の活躍を楽しみにしてくれている。遠くから応援してくれ、帰って会いに行くと自分のことのように喜んでくれる人がたくさんいる。それが彼女を次へ向かわせるのだという。また良い報告をしたい。恩返しをしたいのだという思いが言葉のあちこちに滲んでいた。

「現役選手としてどこまでたどり着きたいかなどの目標は、とても立てられないです。これから強化選手として練習や試合をしてみて、どんな風に思い、進んでいくのか、身を任せます。私は自分に厳しくなれないしモチベーションも高くないんです（笑）でも柔道は楽しいので、たぶん何かの形で一生、関わっていくんじゃないかなと思ってます。地元に帰ってかわいいちびっ子達に教えたいなとか、そんなイメージはずっと持っています。だから教職課程の単位などを取ってみようと勉強もがんばっています」

八幡浜育ちの女の子、静かに次は世界へ立ち向かう。故郷に錦を飾るべく。

小野さんはこの取材後、全日本強化選手として初めて海外遠征して出場した、2月のヨーロッパオープン・ソフィア大会（ブルガリア）の57kg以下級で、準優勝。世界への階段を昇り始めた。

全国初！大学・行政・企業等の連携による地域貢献型スキームのメガソーラー発電所を設置

印南町建設予定地

龍谷大学深草学舎２号館建設予定地

龍谷大学、和歌山県印南町、株式会社京セラソーラーコーポレーション（以下、KSC社）、株式会社 PLUS SOCIAL（以下、PS社）及びトランスバリュー信託株式会社（以下、トランスバリュー）が連携して、全国初となる地域貢献型メガソーラー発電所「龍谷ソーラーパーク」を設置する。

本学では、（独）科学技術振興機構の実施する事業「地域に根ざした脱温暖化・環境共生社会」に採択された本学の研究開発プロジェクト『「地域再生型環境エネルギーシステム実装のための広域公共人材育成・活用システムの形成」代表：政策学部教授 白石克孝（研究期間：2010 年 10 月～2013 年 9 月）』の研究成果をもとに「地域貢献型メガソーラー発電事業」のモデルを考案しており、今回そのモデルをもとに、龍谷大学、印南町、KSC社、PS社及びトランスバリューが連携し、「地域貢献型メガソーラー発電事業」の実現に向けて共同で取り組みを進めてきた。

本事業は、龍谷大学が、社会的責任投資（SRI）をおこない印南町、KSC社、PS社、トランスバリューが、それぞれのもつ資源やノウハウなどを供給するかたちで連携する全国初の事業であり、龍谷大学と印南町、KSC社は、生涯学習事業や地域活性化事業などに連携して取り組む。

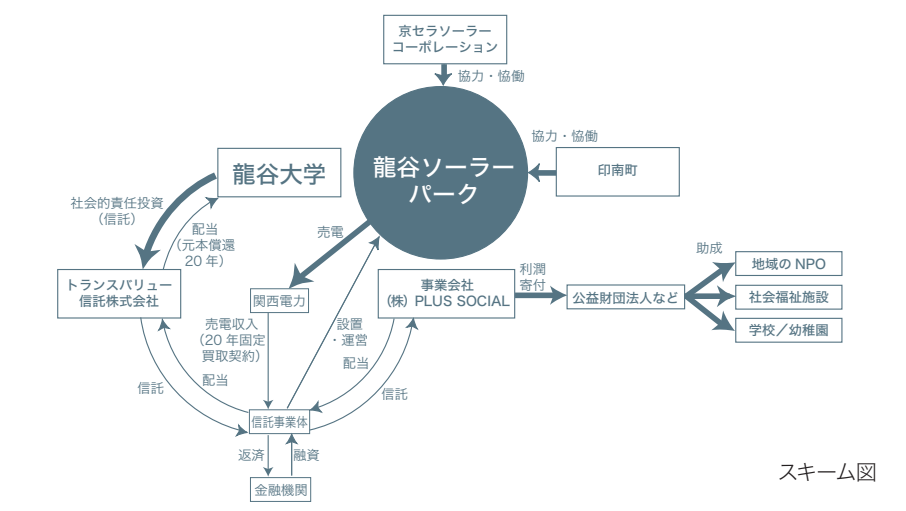
事業概要

再生可能エネルギーの固定価格買取制度が導入されて以来、メガソーラー発電所建設への機運が高まっている。本事業への参画の趣旨は、自らが消費するエネルギーは、できる限り再生可能エネルギーとして生み出そうという発想に立つもの。具体的には、龍谷大学が投資する資金をもとに、事業会社であるＰＳ社とトランスバリューが連携。メガソーラー発電所（発電能力合計約 1,850kW）を龍谷大学深草キャンパス及び印南町の町有地に設置し、固定価格買取制度を利用した売電事業をおこなう。本発電所には、京セラ製多結晶シリコン型の高出力太陽電池パネルを合計約 7,500 枚設置する予定。

ＰＳ社は非営利型株式会社として、売電収入から必要経費を差し引いた利益を、設置地域である和歌山県及び京都の地域貢献活動や市民活動の支援資金として提供することになる。

「龍谷ソーラーパーク」概要

場所：
和歌山県印南町大字印南 4483 番地
（町有地・賃借）設置容量 約 1,200kW
和歌山県印南町大字美里 1192 番地
（PS 社所有地）設置容量 約 600kW
京都市伏見区深草塚本町 67 番地
（龍谷大学学舎屋上）設置容量 約 50kW
総発電能力：約 1,850kW
年間発電電力量（予定）：約 1,900,000kWh
工事開始：2013 年 5 月
稼働予定：2013 年 7 月
総事業費：7 億円



スキーム図

全国初！京町家を活用した新キャンパス「深草町家キャンパス」を開設

深草町家キャンパスの概要
所在地：京都市伏見区深草直違橋6丁目303 番地
規　模：木造2階建て 敷地面積（519.2 ㎡）
築年数：151年（1861 年築）
特　徴：母屋、離れ、中庭、土蔵などで構成され、母屋は、2階の天井が低い厨子（つし）2階建て、延べ床面積247.89平方メートル。出格子、通り庇（ひさし）、虫籠（むしこ）窓など、伝統的な京町家の特徴を備えている。

2013年4月、京都市伏見区に京町家を活用した「深草町家キャンパス」が開設される。「深草町家キャンパス」は、京都市が景観的、文化的に価値づけられた伝統的な木造建築物を良好な状態で保存し，活用しながら次世代に継承できるよう、建築基準法の適用除外規定を活用した全国初の条例である「京都市伝統的な木造建築物の保存及び活用に関する条例」の適用第1号の保存建築物にもなる。

「深草町家キャンパス」の開設後は、砂川学区自治連合会、深草学区自治連合会、深草商店街振興組合などと連携し、地域交流・協働事業や教育・研究関連事業を展開する予定。なお、これらの事業は、文部科学省が発表した「大学改革実行プラン」（2012年6月）にある「地域再生の核となる大学づくり（COC[Center of Community]）構想の推進」に沿ったもので、本学が先行的に実施する取り組みにもなる。また、2015年4月の国際文化学部の移転に伴い、深草キャンパスは、多文化共生キャンパスの拠点となるが、今回の町家もその一環として、国際交流・国際化を展開する施設になる予定である。

龍谷大学と株式会社日本政策金融公庫が「産学連携の協力推進に関する覚書」を締結

赤松学長と多田大津支店長

龍谷大学と株式会社日本政策金融公庫は2013年1月23日（水）に、「産学連携の協力推進に関する覚書」を締結した。この連携の基本的内容は、日本政策金融公庫の京滋地区内5支店（大津支店、彦根支店、京都支店、西陣支店及び舞鶴支店）のいずれかに、中小企業者及び農林水産業者から技術開発や技術改良などに関する相談があれば、必要に応じて龍谷大学に取り次ぐこと。一方で、龍谷大学に研究・技術相談などを申し込んだ中小企業者などから、資金や経営などに関する相談があれば、必要に応じて日本公庫京滋地区内5支店のいずれかに取り次ぐ。このようにして、京滋地区内の中小企業者などが抱える課題の解決をめざすというものだ。

今後は2015年に開設予定の農学部における農林分野の研究シーズとの連携やレンタルラボに入居しているベンチャー企業の支援など、幅広い分野での連携が期待されている。また、定期的な情報交換、産学連携のプロジェクト化、主催するイベントへの参画、インターンシップの推進、保有するネットワークの活用なども検討している。

龍谷ミュージアムが「京（みやこ）環境配慮建築物の最優秀賞」を受賞

龍谷ミュージアム

龍谷ミュージアム（京都市下京区）が、京都市環境配慮建築物顕彰制度において、最優秀賞を受賞した。この制度は、京都にふさわしい環境配慮建築物を普及・啓発することを目的として創設されたもので、京都市では初めての取り組みである。

龍谷ミュージアムは、世界遺産である西本願寺の正面に位置し、町並みと調和のとれた端正な外観が特徴。その正面は、セラミックルーバーによる簾を外壁に設け、京都らしい意匠とすると同時に、西日の直射から壁を守り施設内の温度を下げる省エネ設計となっている。さらに、１階の通り抜け通路や中庭などにより地域に開かれた建物であることが評価され、最優秀賞の受賞に至った。

受賞に際し、赤松学長は「龍谷大学では、新たに設置する建物は省エネルギーに配慮した整備をおこない、エコキャンパス実現に向け、エネルギー使用量10％以上の削減をめざした取り組みをおこなっています。この度、本学の龍谷ミュージアムが、自然環境の積極的利用や周辺環境や地域の歴史への配慮、地域に開かれた建物であることを評価いただき、大変うれしく思っています」と喜びを語った。

第５回テクノルネサンス・ジャパンで最優秀賞を受賞

「チーム内田研究室」のメンバー白數竜也さん、辰巳優斗さん、児玉隆平さん

日本経済新聞社主催の第５回テクノルネサンス・ジャパン「企業に研究開発してほしい未来の夢」アイデアコンテストにおいて、理工学研究科物質化学専攻・内田研究室の学生グループ「チーム内田研究室」のメンバーが提案した「接着剤+第三の液体！？～イオン液体を用いた多機能性未来型接着剤の提案～」が、スリーボンド賞の最優秀賞を受賞した。内田研究室は昨年度もスリーボンド賞の優秀賞を受賞しており、２年連続の受賞は快挙といえる。

このコンテストは、大学での研究と企業のコア技術・事業を組み合わせることで、新しいサービスや製品のアイデア、それらを展開するためのビジネスモデルの提案をおこなうことをめざしている。本年度は企業５社（株式会社スリーボンド、大日本印刷株式会社、東レ株式会社、株式会社デンソー、株式会社村田製作所）に対し、全国各地の大学などから２０５件の応募があった。チーム内田研究室のメンバーは、「２年連続での受賞は本当にうれしいです。また、このコンテストを通して、他大学の学生や参加企業の方と交流ができ、普段経験することができない貴重な経験ができました。この経験を活かし、より学業・研究などに励んでいきたいです」と喜びと今後の抱負を語った。

香川県、島根県及び長野県と就職支援に関する協定を締結

龍谷大学が香川県（２０１２年１０月１７日）、島根県（２０１３年２月４日）及び長野県（２０１３年２月２０日）と就職支援に関する協定を締結した。

今回、協定を締結した３県では、少子・高齢化の進展や大学進学時における若年層の県外流出による、生産年齢人口の減少が予想されている。また、県の活性化を図る上で、県外に進学した学生を呼び戻すことが重要な課題となっている。このようななかで、県外大学に進学した地元出身者のUターン就職を支援し、人材の質的･量的確保を図ることを目的として、他大学に先駆けて自治体（鳥取県・徳島県・広島県・愛媛県）との連携による就職支援事業に積極的に取り組んでいる龍谷大学と、本協定を締結するに至った。

今回の協定により、龍谷大学では、香川県、島根県及び長野県との具体的な連携方策を進め、U･Iターン就職を希望する学生に対して、地元における有効な情報を低年次より提供することができるようになった。雇用情勢の厳しい今日において、自治体との組織的な就職支援を展開していく。

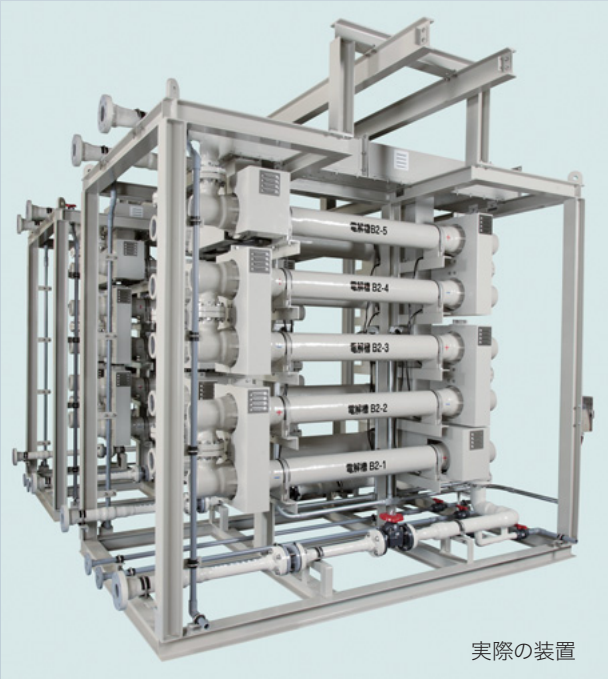
社会との連携

社会に開かれた大学として、大学の知的資源を広く社会に還元。

大学の主要な活動・役割の一つであるエクステンション（普及）活動を
中心的に担う拠点として開設された龍谷エクステンションセンター（略称：REC）。
「社会に開かれた大学」として多彩な社会連携事業を展開している。

Ryukoku Extension Center REC

水処理薬品を循環再利用できる排水処理技術の開発に初めて成功！
従来技術よりも処理能力が約 10 倍向上



実際の装置

記者会見での岸本教授（左）

理工学部環境ソリューション工学科の岸本直之教授のグループとクロリンエンジニアズ株式会社（本社：東京都中央区）が共同で、水処理薬品による汚泥が発生しない、工業用排水処理能力を飛躍的に高めた排水処理技術の開発に、初めて成功した。

現在、日本の産業において、自動車産業、印刷業、金属加工業など様々な業種が工業廃水を排出しており、これらの産業だけでもその排水量は数百万トン規模にのぼると考えられている。また、水環境にかかわる「排水処理」や「水の浄化」技術の開発・事業化は、昨今大きな関心が持たれている。昨年、韓国大手家電メーカーなどもそれらの事業への参入を発表するなど、国内だけではなく海外でも新規の技術開発・事業化の分野として注目されている。

工業排水に含まれる環境に有害な有機化合物の処理において、従来の技術では処理用の薬品により汚泥が発生し、その汚泥の廃棄処理が必要であった。本技術においても同様に薬品を使用するが、薬品を循環して再利用することができるため汚泥は発生せず、汚泥処理が不要になった。このような、水処理薬品の再利用が可能な有害有機化合物の分解処理技術は初めてである。

さらに、一般に排水処理技術として用いられることの多い「オゾン酸化処理技術」よりも、本技術が処理能力で10倍程度、エネルギー効率で 1.5 倍程度優れているという実験結果も得られている。

既に実用装置の設計・試作も完了し、分解処理が極めて難しい有機化合物を含む排水も処理することができる装置として応用展開が期待されている。

龍谷大学の公開講座
全213講座開講
※2013年前期開講分

REC
Community College
レックコミュニティカレッジ

2013年度前期 パンフレット請求受付中
無料でお届けします！

●REC京都　〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
●REC滋賀　〒520-2194 大津市瀬田大江町横谷1-5
http://rec-ryukoku.jp/

電話受付／月曜日～土曜日（祝日を除く）10:00～16:00

TEL 077-543-7848
075-645-7892
06-6344-0284

※各講座には定員が設定されており、受付は電話またはホームページによる申込先着順となります。
※電話・ホームページでの申込時にお尋ねします「氏名」「住所」「電話番号」等の個人情報は受講登録や会員登録、受講名簿の作成、講座案内資料の送付等を目的として使用します。

龍谷大学 RYUKOKU UNIVERSITY
文化庁 京都から文化を
京都市後援 大津市後援 大阪市後援

龍谷大学の東日本大震災への対応

硯石の洗浄・整理ボランティア

神輿を担ぐ学生

京都名産品コーナーでの販売

龍谷大学では、東日本大震災直後から、様々な復興支援活動を展開し、大学主催の被災地でのボランティア活動は、昨年度計5回、延べ130名の学生と教職員が参加。石巻市での瓦礫撤去や側溝掃除を中心に活動をおこなった。今年度も計2回、延べ69名の学生と教職員が石巻市雄勝町で地場産業復興のためのボランティア活動を実施した。

11月16日（金）～19日（月）に実施された2回目のボランティア活動では、宮城県石巻市雄勝町の復興の象徴である仮設商店街「おがつ店（たな）こ屋街」の1周年イベントの支援活動と、地場産業である硯石産業の支援活動（洗浄作業）をおこなった。この取り組みの実施に向けてはまず、京都の各企業に名産品の提供をお願いすることから始まった。賛同いただいた企業から集まった名産品（計9社の提供品）を乗せ、学生・教職員36名は京都を出発した。「おがつ店（たな）こ屋街」が並ぶイベント会場では、本学の学生がこれらの名産品（八つ橋、京銘茶など）を販売・展示する「京都名産品コーナー」を開設し、集まった雄勝町の地元の方々に〝京都のこころ〟を届けた。最初は地元の方々に話しかける自信のなかった学生達も、京都からボランティアに来て名産品を売っていることが地元の人達に喜ばれていることが分かると、まさに「見て、聞いて、感じる」という今回のボランティアの目的に確信を持ったようであった。会場では、津波に流されながらも復活した御神輿も登場し、地元の人達の復興への力強いエネルギーも感じる場となった。

今後も、大学として東日本大震災をどのように受け止め、考えていくかを真摯に考えたうえで、長期にわたって継続的に支援活動に取り組んでいく予定だ。

地元の子ども達との交流

2回目の福島いわき物産展を開催

福島いわき物産展の様子

東日本大震災の被災地を支援するため、社会学部の学生らが２０１２年１１月２３日（金）～２５日（日）に滋賀県大津市一里山のショッピングモールで福島県いわき市の特産品を販売する「福島いわき復興物産展」を開催した。物産展の開催は昨年に続いて２回目。いわき市の農作物生産者との触れ合いや、敦賀市の原子力発電所の見学を通じ、原発事故の脅威や、放射性物質による食の風評被害の実態などを学んだ、同学部の２・３年生１２名が中心となって企画。いわき市の企業などでつくる「いわきビジネス復興協議会」と協力して開催し、学生達が自分達でPR方法や会場運営なども考えた。会場では、福島県産のトマトを使用したジュースや、いちじくを使用したジャム、いわき市内で製造された昆布の佃煮やイカの塩辛などを販売し、多くの購入者で賑わいをみせた。なお、本物産展の売り上げはいわき市の生産者に贈られた。

東日本大震災復興支援フォーラムを開催

講演会の様子

２０１２年１２月１日（土）、深草キャンパスで、震災直後から被災地を取材している写真家の大西暢夫氏を迎え、東日本大震災復興支援フォーラム「震災は他人事（ひとごと）じゃない！東北沿岸６００キロの震災報告～つながり続けるということ～」を開催した。

大西氏の講演では、被災地の様子や現場で出会った人から聞いた話などが写真とともに紹介され、参加者は時には涙を流しながら、熱心に話を聞いていた。参加した人達からは、「伝えることの大切さがわかりました。今回大西さんから教えていただいたことを、周りの人にしっかりと伝えていこうと思いました」、「震災から１年半以上が経ち、私のなかで震災への思いが少しずつ薄れていっているなかで、今日の話を聞いて決して風化させてはいけないと改めて感じました」など、たくさんの思いのこもった感想を聞くことができた。また、大西氏の写真展も同日に開催し、約２００名が来場した。

被災地の“今までの復興支援”“これからの復興支援”について語ろう！を開催

ワークショップの様子

２０１２年１２月１４日（金）、深草キャンパスで、石巻市社会福祉協議会の阿部由紀さんを講師に迎え、“今までの復興支援”と“これからの復興支援”について考えるワークショップを開催した。

阿部さんは宮城県石巻市雄勝町の出身であり、自らも被災するなかで、震災直後から最前線で被災者支援、復興のために働き続けている。ワークショップでは、これまでの体験から震災直後の様子、その際、どのような判断を迫られながら行動したのか、何を大切にしながら毎日を過ごしていたかについて語っていただいた。阿部さんのお話のなかには、復興支援という枠だけでなく、これから社会に出ていく学生が生きていく上で重要なキーワードがたくさんあり、学生にとって学びの多い時間となった。

「真の国際人」を育むために――。2015年、深草キャンパスに移転する国際文化学部の取り組み

外国人教授の視点を通して実践的に学ぶ、自国の文化と異文化

Education, Unlimited

国際文化学部

互いを知り、深く理解する大切さ

知識を経験へとつなぐ教育をめざす国際文化学部では、留学をその実践の機会として位置付けている。

留学前には異文化ギャップへの対応方法を学ぶ事前学習、帰国後には留学先での体験を振り返る事後学習を実施する。これら留学前後の学びを充実させることで日本と海外との違いや、世界の多様な視点について総合的な理解を得ることができる。

「人間が生きていくなかで、もっとも大切なのはコミュニケーション能力。そのなかで語学力以上に大切なことは相手の文化や習慣を知り、互いの違いを深く理解することです」と話すのは清水耕介教授。

学生自身が目的に応じて留学期間を選択できる龍谷大学独自の留学プログラムのほか、夏期や春期の休暇期間を利用する国際文化学部独自の短期留学制度などもあり、海外留学を希望する学生を積極的に支援している。また、留学中の学生が、日本の留学経験のある専門アドバイザーに相談できる「語学・留学サポートデスク」も設置。これらの支援制度が充実したことによって留学は学びの一部となり、「遠い夢」から「身近な現実」へと変わった。

また、学部内にも国際交流の機会は多い。「国際文化学部には各学年に40〜50名程度の留学生が在籍しています。彼らとの交流や授業での文化比較などを通じて、日常的に国際感覚を養うことができます。知識と

経験をともに身につけることが『真の国際人』を育むと考えています」

国際文化学という幅広い学問領域を学ぶうえで、2年次から学生自身の関心や目的に応じて七つのコースから主専攻、副専攻を選択することができるのも国際文化学部の特色だ。コースには文化理解分野から「国際共生コース」「芸術・メディアコース」「地域文化コース」、言語分野から「英語教育コース」「フランス語研究コース」「中国語研究コース」「コリア語研究コース」が用意され、これらを組み合わせることでより明確な目標を持って学ぶことができる。

狂言、歌舞伎、アニメ、世界各地の舞台演劇など、洋の東西を問わず、伝統芸能からサブカルチャーまで、あらゆる演劇関係の資料が並ぶサルズ教授の研究室

本物から得る感動

国際文化学部教員の約4割は外国人。その出身地はアジア、北アメリカ、ヨーロッパ、オセアニアと国際色豊かだ。アメリカ・ニューヨーク州出身のジョナ・サルズ教授もその一人。比較演劇論を研究するサルズ教授は、かつて世界中の演劇を観るため各地の舞台を訪ね歩いた経験を持つ。ベケットやシェイクスピアなどの西洋劇をおもな研究テーマとしていたサルズ教授だが、初めてニューヨークで観た歌舞伎は「あまりにも素晴らしい体験だった」という。

「当時（1979年）は、日本語もまったくわかりませんでしたが、歌舞伎の発声法や動作、その高い芸術性にとても感動したんです」

現在、サルズ教授は授業に狂言師や能楽師などを講師として招き、日本文化が育んできた伝統芸能の魅力を学生達に伝えようとしている。

「伝統芸能が持つ表現の豊かさやストーリー性、能面や衣裳などの道具の美しさ。これらは舞台の映像を観るだけでは感じ取ることができません。実際に本物にふれ、体験を通じて初めて自身の関心を呼び起こすことができるのです」

サルズ教授の研究室では、日本人学生と留学生とが「文楽」について議論を交わすこともめずらしくはない。生まれ育った環境が違う者同士、同じ舞台を観ても興味の方向はまったく異なる。

「伝統芸能を観ることで、日本人学生は着物などの日本文化を見直す機会となることが多いようですね。一方で留学生は、マンガやアニメーションなどのサブカルチャーとの関連性などに興味が集まります。レポート執筆の際には、ほとんどの留学生が自作した新作狂言を発表するのも特徴的ですね」

サルズ教授は、授業を通してかつて自身が体験した感動を学生達に伝えようとしている。伝統芸能の表層だけではなく、その裏側にある文化的背景までをも学ぶことは、日本人の歴史や風習なども知ることにつながるからだ。自国の文化を熟知したうえでの留学体験は、互いの国のありかたを比較するまたとない機会である。3年次、4年次と進むごとに学生達の関心分野は広がり、卒業制作・論文のテーマは毎年、ほかに類を見ないほどの多彩さだという。

瀬田から深草へ

現在、瀬田キャンパスにある国際文化学部は、2015年4月に深草キャンパスに移転を予定している。

国際都市・京都に学びの拠点を移すことのメリットを、サルズ教授は次のように話す。

「伝統芸能だけでなく、茶道や華道など日本文化の中心地ともいえる京都で学ぶ経験は、学生達に多くの気づきを与えるでしょう。また、授業のゲストとして迎える講師陣もこれまで以上に幅広い分野を検討しています。京都には、『セミナーハウス　ともいき荘』や『アバンティ響都ホール』、『深草町家キャンパス』など龍谷大学の各種施設も充実していますので、伝統芸能を実演する授業はより活発におこなっていきたいですね」

国際文化学部の教育目標は、4年間の学びを通して、自分の想いを自分の言葉で伝えられるようになること。文化や国を超えて他者を深く理解することができる人間の育成に、2015年からは京都で取り組むこととなる。

国際文化学部 **ジョナ・サルズ** 教授

1956年、アメリカ・ニューヨーク州生まれ。
ハバーフォード大学卒業。PhD.（ニューヨーク大学）。
研究分野は比較演劇。
狂言、ベケットからインターカルチャー演劇まで幅広い。
1981年「能法劇団」を茂山あきら氏と結成。演出家でもあり、自ら舞台に立つことも。
1984年には日本の伝統芸能のワークショップ「T.T.T.（トラディショナル・シアター・トレーニング）」を創設するなど多彩な活動をおこなっている。

シリーズ
龍谷の至宝
⑮

『建長版 往生要集』

6冊　縦24㎝×横15㎝　鎌倉時代　1253（建長5）年　龍谷大学大宮図書館所蔵

本書は平安時代の学僧として名高い恵心僧都源信が985（寛和元）年に著した仏教書である。

原本は上・中・下の3巻が10章に分けて構成されており、地獄と極楽浄土についての詳細な解説や、念仏修行の大切さなどが整然と説かれている。

壮年期から晩年までを比叡山横川で隠棲して過ごした恵心僧都は、その生涯の多くを浄土教の研究に費やして、天台宗をもとにした天台浄土教の礎を築いた。

本書では、幾多もの経典から引用した900にも及ぶ要文によって極楽往生のための教義や修行内容、その具体的な方法までもが説かれており、問答形式でまとめられた内容の簡明さもあって貴族から庶民に至るまで広い層に受け入れられた。本書が記された平安時代中期は、長く続いた摂関政治による世情不安や武士階級の台頭など、社会の仕組みが大きく変わり始めた時代。漠然とした不安感に包まれた時世のなかで、念仏を唱えることが極楽浄土につながると説いた本書は、まさに格好の「極楽往生のための指南書」だったのだろう。

また、第1章の「厭離穢土（おんりえど）」には凄惨な地獄の様子が克明に描写されており、後世に描かれた六道絵や地獄変相図などの仏教画にも強い影響を与えた。いわば現代に伝わる地獄イメージの元祖だとも言える。

本学が所蔵するこの版本は全6巻。第6巻末には「建長五年在歳癸丑四月肇彫九月畢切　願主道妙」と記載されていることから、1253（建長5）年に、僧とおぼしき道妙という人物によってつくられたものではないかと考えられる。同じく鎌倉時代の版本には、承元版や建保版なども存在するが、もっとも広く普及したのはこの建長版であったとされる。刊記に「今の本はこれ遣唐本なり」と記されていることから遣唐本とも呼ばれ、中国においても賞賛された。

本学所蔵の版本は現存する遣唐本としては最古のものである。

恵心僧都の天台浄土教は後の鎌倉仏教にも大きな影響を与え、親鸞聖人は恵心僧都を法然上人などとともに七高僧の一人に数えている。

今から1000年以上も昔の日本人が極楽浄土へとたどり着くための生き方を説いた本書に読み入ると、現代に生きる私達にも日々の暮らしの大切さを切々と語りかけてくるように思える。

不安の時代に生まれた「極楽往生のための指南書」

1章「厭離穢土」
2章「欣求浄土」
3章「極楽証拠」
4章「正修念仏」
5章「助念方法」
6章「別時念仏」
7章「念仏利益」
8章「念仏証拠」
9章「往生諸行」
10章「問答料簡」

4章「正修念仏」の一節

応念、一切衆生悉有仏性、我皆令入無余涅槃。此心即是饒益有情戒。亦是恩徳心。亦是縁因仏性、応身菩提因。

一切の衆生は、ことごとく仏性をそなえているのであるから、我は皆を全ての煩悩を断った涅槃に入らせようと念ずるのがよい。この心は、すなわち世の人を導き恵む饒益有情戒（にょうやくうじょうかい）であり、また衆生を恵む恩徳の心であり、また理智を助ける縁となる縁因仏性であって、仏が生身の姿を現す応身の菩提を得るもととなるのである。

チベット文化に魅了された仏教文化学のパイオニア

青木文教（あおき ぶんきょう）

明治時代、大谷探検隊を率いて中央アジア各地で、仏教史の疑問を紐解こうとした大谷光瑞師。彼が生涯にわたって友情を結んだチベット仏教の最高指導者、ダライ・ラマ13世との掛け橋となった人物がいた――。

ダライ・ラマ13世とチベットの人々に愛され、多くの研究成果を残しながらも、研究者としては不遇の人生を送った青木文教その人だ。

滋賀県高島市の浄土真宗本願寺派、正福寺に生まれ、
仏教大学（現龍谷大学）を退学して西本願寺宗主、大谷光瑞師の命でチベット調査に参加。
3年間にわたってラッサに滞在し、チベット語や地理、風習などを研究した。
チベットに大きな関心を示しながらも生涯現地を訪れることのなかった光瑞師に代わって
チベット文化における様々な記録を残した。1956(昭和31)年逝去。(写真中央)

大谷光瑞師の命を受け、チベットへと旅立つ

青木文教は1886（明治19）年、滋賀県高島市の浄土真宗本願寺派、正福寺の長男として誕生した。

清流、安曇川にほど近い自然豊かなこの地で成長した青木は京都市内の中学校を卒業後、1907（明治40）年に仏教大学（現龍谷大学）に入学した。

その勤勉さと学問の成績が認められ、大学2年生のときに、大谷探検隊を率いて中央アジア各地を調査していた浄土真宗本願寺派第22世宗主、大谷光瑞師からインドの仏教遺跡調査を命じられることになる。

仏教大学を退学し、インドへと旅立った青木は精力的に調査をおこない、ますます光瑞師の信頼を得るようになった。そして、インドに着いて約半年が経った1910（明治43）年3月、光瑞師の命を受け戦乱で国を追われインドに亡命していたチベット仏教の最高指導者、ダライ・ラマ13世に謁見することになる。

謁見では、今後のさらなる交流と互いの留学生受け入れを約束。1年後にはチベットからの留学生が日本へ派遣され、その受け入れを西本願寺がおこなった。青木は留学生の身の回りの世話をしながらチベット語を学び、いつか訪れるであろう自身のチベット留学に備えていた。

青木がチベット行きを熱望していた理由のひとつに『チベット大蔵経』の入手がある。それまで日本に伝来していた仏教の経典は、仏教が誕生した古代インドの言葉で伝えられ、

青木文教がチベットから持ち帰った経典（正福寺所蔵）

あるいは後に文字に記されたものが中国で漢文に訳されて、日本に伝えられたものだ。サンスクリット本に忠実な翻訳であり、国家的事業としておこなわれたチベット大蔵経を手に入れることは、光瑞師や西本願寺にとって悲願でもあった。

ダライ・ラマ13世から正式に青木のチベット行きが打診されたのは1911（明治44）年のこと。青木25歳のときだった。

ラッサでの日々

当時のチベットは「アジア最後の秘境」と呼ばれその文化や環境はおろか、詳細な入国ルートすらも把握する者は少なかった。当然、チベットに入国した経験のある日本人はまだ数えるほど。青木にはチベット法王庁が手配した案内人が帯同したとはいえ、国境で目を光らせるイギリス、中国、ネパールの目をかいくぐり、険しい山峡を進む旅は想像を絶する困難さだった。

ダライ・ラマ13世はチベットの都、ラッサに到着した青木に貴族邸の一角を与え、チベット語の家庭教師を付けてもてなした。その後、青木に遅れてラッサに到着した西本願寺の多田等観が僧院で生活を送ったことを考えると、青木は賓客として格別に優遇されていたことがわかる。

ラッサ滞在中の青木は、チベット仏教やチベット語の学修だけではなく、暇を見つけては街に出て文化風俗や市井の生活習慣などを観察して歩いた。当時としてはめずらしく写真が趣味だった青木は、人々から撮影を頼まれることも多く、勉強にあてる時間のやりくりに苦労するほどだった。青木は当時のことを次のように記録している。

「予がなまじ写真に趣味をもっていたため、一人か二人の素人写真屋しかないところのラッサでは、予のキャメラが驚くべき活動をなし、無料撮影の写真師として忙殺されたるもまた大なる支障であった。しかしかように修学上に失った損害は活社会から得た知識経験で補われて余りあったと信ずる」

また、青木は世界情勢に暗いチベット法王庁のために、英字新聞や雑誌記事を翻訳して分析し、ダライ・ラマ13世や政府要人に解説していた。イギリス、清、ロシアら大国に狙われ続けていたチベットにとって、青木がもたらす情報は貴重なものだったのだ。

不遇の晩年

青木がラッサに滞在してちょうど3年が過ぎた頃、日本では光瑞師が西本願寺宗主を退く事態が起きていた。

この報せとともに帰国命令を受けた青木は、1916（大正5）年1月、ラッサを後にして帰国の途に就くこととなる。ダライ・ラマ13世は別れを惜しみ、青木に「再びチベットを訪れるように」と言葉を贈ったという。

また、青木の最大の目的だったチベット大蔵経も授かることができた。ダライ・ラマ13世から西本願寺へと贈られたチベット大蔵経は、ラッサから遠く240キロ離れた寺院にあった。そのため、青木はひと足先に帰国する仏教学者の河口慧海にその受け取りを頼み、インドで静養中の光瑞師への受け渡しを託した。

しかし、この判断が青木の運命を大きく変えることになる。

河口に遅れること1年。帰国途中に光瑞師を訪ねた青木は、そこで河口からチベット大蔵経が届けられていないことを知る。そして、日本に帰国した青木を待っていたのは思いも寄らぬ疑惑だった。

河口が、ダライ・ラマ13世から光瑞師へと贈られたチベット大蔵経を預かった事実を否定したのだ。困惑した青木はすぐさま河口に反論し、新聞各社は連日この論争をスキャンダラスに報じた。後に「大正の玉手箱事件」と呼ばれたこの出来事は、双方ともに決定的な証拠が出ないままエスカレートしていく。事態のさらなる混乱を避けようとした光瑞師は、青木に東南アジア諸国の調査を命じ、未解決のままこの事件に終止符を打った。

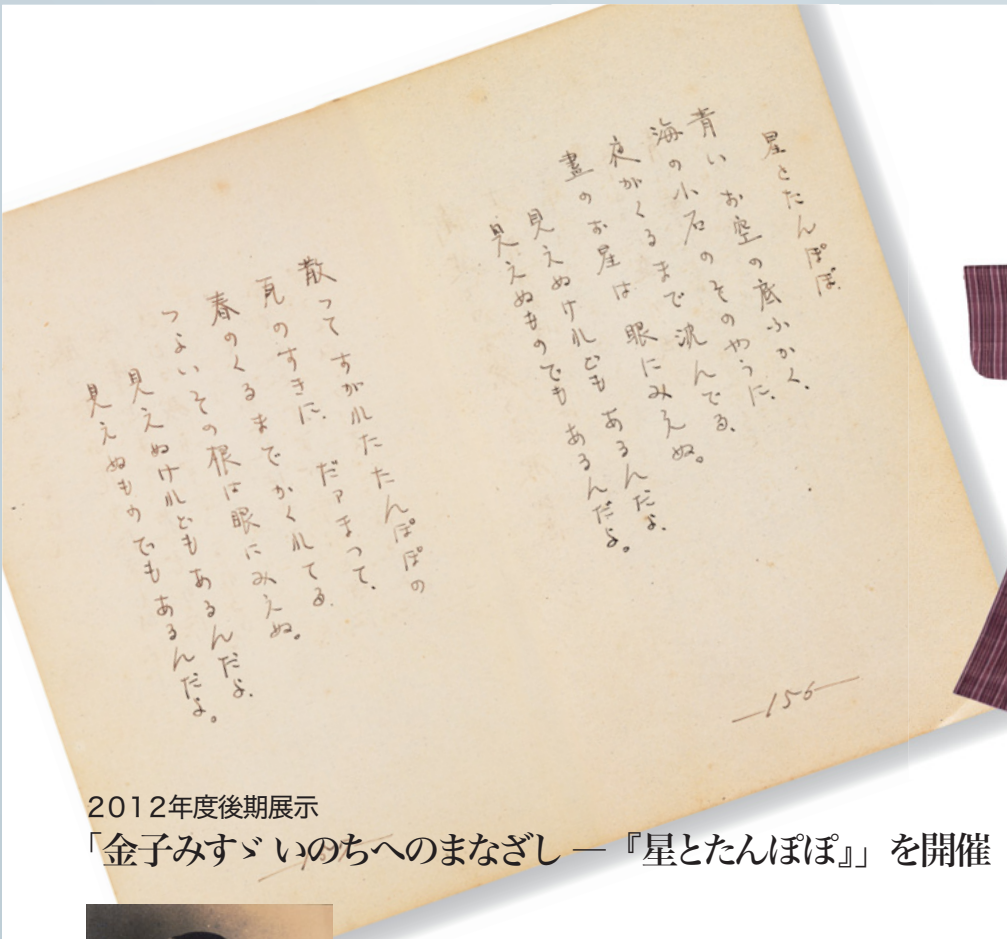
その後の青木は不遇の道を歩むこととなる。市井の研究者として支援者からの援助で細々と暮らす日々は生活に困窮するほどだったという。

青木が東京大学文学部チベット語講師に就任したのは65歳のときのこと。チベットを出国してから35年の歳月が過ぎていた。ようやく学界に迎えられ、精力的に研究をおこなっていた青木だが、講師就任からわずか5年後の1956（昭和31）年11月7日、胃癌によってこの世を去った。

その功績に対し、青木の晩年はけっして豊かなものとは言えなかった。しかし、青木がチベットで記録した手帳や植物標本、風景写真などからは、当時のチベットに暮らす人々の営みを、現代に生きる私達に伝えてくれる。

青木文教が親戚に宛てて現地から送った手紙（正福寺所蔵）

監修：国際文化学部教授　三谷真澄



形見の着物

2012年度後期展示

「金子みすゞ いのちへのまなざし ―『星とたんぽぽ』」を開催

龍谷大学人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センターでは、2012年11月19日（月）～12月21日（金）<第1期>、2013年1月7日（月）～1月31日（木）<第2期>の日程で、研究展示「金子みすゞ いのちへのまなざし―『星とたんぽぽ』」を開催しました。

今回の研究展示では、金子みすゞが亡くなる前に弟の正祐に贈った「3冊の遺稿手帳」（精密複製）や、金子みずゞの娘「ふさえ」の片言を書き留めた手帳「南京玉」、金子みすゞの直筆詩パネル、形見の着物などをはじめとする貴重品、計164点が展示されました。

また、本展は①金子みすゞの生涯と詩の世界をたずねる、②金子みすゞ記念館の矢崎節夫館長や金子みすゞを愛する方々が、ネパールの子ども達のために小学校を創設したり、医療キャンプを開設した足跡などを紹介する、③中国四川省の大地震に遭った子ども達や東日本大震災で被災した小学生に金子みすゞの詩集を寄贈し、子ども達が元気を取り戻す歩みを紹介する3テーマで構成。私達の眼には見えない大切なものについて考える機会や、生きとし生けるもののつながり、尊さを感じ取るきっかけにつながる内容で開催しておりました。

来場者の方からは、「金子みすゞの素直な気持ちに触れ、胸が熱くなりました。大変な時代ですが、自然な気持ちで前向きに明るくがんばりたいものです」、「感動しました。心の底にしみる、そして魂を揺り動かす何かを強く感じました。素晴らしい企画でした」など多くの感想をいただきました。

3冊の遺稿手帳

主催：龍谷大学 人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター
後援：金子みすゞ記念館、金子みすゞ著作保存会、金子みすゞ顕彰会、JULA 出版局

第10回 青春俳句大賞

10回目を迎えた青春俳句大賞では、これまでの「中学生部門」「高校生部門」「短大・大学生部門」「英語部門」「文学部部門」の5部門のほかに、「想いでの修学旅行部門」を新たに加え、本事業を通して多くの方に俳句づくりに取り組んでいただきました。今回は、過去最高の80007句もの力作が寄せられ、厳正なる選考をおこなった結果、見事に入賞を果たした作品をここに発表します。

最優秀賞

●中学生部門

一人また一人と笑ふ声涼し

神奈川県
安保 菜々子 さん
川崎市立生田中学校3年

評・大石悦子

一人の人が笑うと、その隣の人が笑い、それを見た人がまた笑うというように、笑いは、次々に伝わっていきます。その場の愉快な気分を表すのに、爽快さをいう「涼し」という季語を使って表現した巧みな句です。

●高校生部門

長き夜の火星の水のことなどを

愛媛県
東影 喜子 さん
愛媛県立松山東高等学校3年

評・大石悦子

最近の火星探査機の報告によると、火星に川の流れた痕があったとか。水があれば生物の生息の可能性もある…。秋の夜の語らいにはうってつけの話題です。青年らしいロマンの感じられる句です。

●短大・大学生部門

折り鶴の尾の真つ直ぐに涼新た

沖縄県
伊波 信之祐 さん
琉球大学1年

評・茨木和生

心を込めて丁寧に折った折り鶴であることは、「尾の真っ直ぐに」という表現でよくわかる。こんな折り鶴の姿を、「涼新た」という季語がうまく支えている。

●英語部門

Birds migrate back across borders we cannot cross

東京都
堀井 和泉 さん
一般

評・ウルフ・スティーブン

人がやむなく縛られる国境線、その数々の制約を超越し遙か上空に行き来する鳥達、その自由な渡りは、生と死の区切りをも超えた輪廻の空間さえも、羨望の気持ちで思わせる。

●文学部部門

本棚の向こうをすべる夏帽子

茨城県
大島 愛美 さん
一般

評・越前谷宏

見えるのは帽子だけだが、ちょっとおすましで、ちょっと誇らしげな幼い表情が見て取れるようだ。背筋をしゃんと伸ばし、読み終えたばかりの本を返しにいっているのだろうか。かわいい。なんといっても「向こうをすべる」が秀逸。

●想いでの修学旅行部門

ハイビスカス赤い戦火がよみがえる

兵庫県
村上 雄大 さん
多可町立加美中学校3年

評・有馬朗人

修学旅行で沖縄に行ったのである。沖縄には草木が繁り花が美しく咲く。そのなかでもハイビスカスの花が見事。赤い色から沖縄戦の悲劇が思い出され、心がひきしまったのである。

優秀賞

●中学生部門

夕焼けの中から母の声がする

東京都
堀 光瑠 さん
世田谷区立
三宿中学校1年

夕焼けの刻は何となく人恋しくなる。昼から夜への刻、過ぎてゆく一日。そのような風景のなかに聞き取るのは、幼い頃に自分を呼んでくれた母の声であろうか。

評・寺井谷子

●高校生部門

一日のナース体験白牡丹

福島県
加藤 理彩 さん
福島県立
須賀川高等学校2年

高等学校の授業として一日のナース体験が組み込まれている。緊張して受けた一日の体験授業、「白牡丹」という季語で緊張の一日であったことがわかる。

評・茨木和生

●短大・大学生部門

独りとはケモノヘンなり雲の峰

京都府
中田 岳俊 さん
京都大学1年

「独」という字が獣篇であることを思う。獣の様に屈まった思いは、「青春」の証でもあろう。「雲の峰」が真夏の空の下であることを伝え、野性味の溢れる一句となった。

評・寺井谷子

●中学生部門

海胆という漢字を初めて知った夏

東京都
田中 涼 さん
足立区立
西新井中学校2年

うには栗のいがに似ている。うにの仲間の一つバフンウニやアカウニは雲丹と書く。これはまだ知っていても、海胆と書くことを初めて知ったことを驚いている所が新鮮である。

評・有馬朗人

●高校生部門

レプリカの自由の女神雲の峰

広島県
浅津 大雅 さん
広島県立
広島高等学校2年

「レプリカ」の持つまだ見ぬ対象への憧憬。それが「自由の女神」であるということで、高々と挙げた右手が見えるようだ。その腕の先に湧く「雲の峰」。未来への希望。

評・寺井谷子

●短大・大学生部門

子規の忌や舌で捉へる親知らず

沖縄県
伊波 信之祐 さん
琉球大学1年

「親知らず」というのは越後の地名ではなく、最もおそく生える大臼歯、つまり知歯の俗称である。その親不知歯の異和感を舌でさわりながら、子規のことを思っているのである。子規忌という季語が利いている。

評・大峯あきら

選考委員特別賞

●有馬朗人 選

三陸や土台が残る炎天下

東京都
安井 雅貴 さん
西東京市立
田無第二中学校3年

東日本大震災・大津波の被害を受けた三陸地方の光景である。津波で流された家の土台だけが残っている。そこに夏の太陽が照りつけているのである。一日も早い復興を祈っている。

●茨木和生 選

蠅たかる日干し煉瓦の一日目

千葉県
大塚 雅也 さん
開成高等学校2年

日干しを始めたばかりの煉瓦が庭一面に拡げられている。日差しにてかてかと光っている煉瓦に何匹もの蠅がたかっている光景を見た驚きが伝わってくる。

●大石悦子 選

夏空に飛び立ちさうな高速路

東京都
相原 暢 さん
明治大学2年

登り勾配になった湾岸の高速道路を、スピードを上げて愛車を飛ばします。一瞬、若者は入道雲の湧く天空に飛び立つようなダイナミックな爽快感を味わったことでしょう。青春性のあふれた句です。

選考委員総評

有馬朗人　小学生や中学生の俳句は自由に、思った通り作ることでよい。それが小・中学生がのびのびとした新鮮な俳句を生み出す可能性の高い理由である。一方、高校生になると、俳句にせよ広く芸術でも学問でも一定の形を学ばなければならない年齢であり、どうしても俳句が類型化する。大学生になると、その段階を越え、いよいよ本格的な作家になる年齢になる。高校生には形を学びながらも類型に囚われないように、大学生はもう一人前の作家であると覚悟して俳句してほしいものである。

茨木和生　選考委員の一人として、投句についての注意をしておきたい。新設部門の「想いでの修学旅行」の作品に、季語のない、無季の作品が多かったのは、固有名詞に力を入れ過ぎだからだと思った。さらに無理なルビの付け方、例えば「金閣寺」を「きん」と読ませるのなどが目立ったが、これは良くない。入選した作品に学んで、学校生活のなかで把握した、生き生きとした作品を期待したい。

大石悦子　例年、幼さの残るものが目につく中学生部門ですが、今年は1年生の作品に佳いものがあり、大変頼もしく嬉しいことに思いました。語彙や感性などを俳句を通して育むことへの大きな期待を持ちました。高校生部門は、自在な発想の句が多く、楽しく選考にあたりました。等身大というか、自分らしさをよく表した句に、強く訴えるものがあるのは、どの部門にも共通していえることかと思います。短大・大学生部門は、やや観念的な句が目につきましたが、この部門の年代の傾向かとも思います。想いでの修学旅行部門は、今年初めての企画でしたが、近頃の学生諸君はこんなにあちこちへ旅行するのかと驚きました。仲間との楽しい思い出を、俳句にして残すということの素晴らしさを、後年きっと実感されるだろ

●英語部門

Looking at pictures of her younger days My mother asks me “Is that you?”

京都府
石澤 幸子 さん　一般
評・ウルフ・スティーブン

生き写しの母娘、うっかり娘かと思った若き日の自分を見る母は、親から子へと生のバトンが次々に送られ、その営みのなかで親は子のなかに生き、またその子は次の世代に生きることを知っているのか。

●英語部門

Cutting the big tuna fishmonger’s biceps standing out

京都府
朽木 久子 さん　一般
評・ウルフ・スティーブン

勢力と活力そのものの姿のスケッチ。常に大魚をさばくその男の腕は筋骨を育て、日常の営みのなかにあって武勇の光を放っている。その焦点をさりげなく拾った句。

●文学部部門

夕焼けと しおりを挟み 閉じた本

栃木県
鮫ノ口 ことみ さん
宇都宮短期大学附属高等学校3年

評・越前谷宏

朝早くから、図書館に閉じこもっていたのだろう。気がつくともう夕暮れ。挟んだしおりの位置が今日一日の読書量を表している。「夕焼けと」の「と」が効く。「閉じた本」の五音に充実感が溢れ出ている。

●想いでの修学旅行部門

霞立つ 白河を越え みちのくに

東京都
大窪 有太 さん
お茶の水女子大学附属中学校3年

評・大峯あきら

白河の関は昔から三大関所の一つとして有名で、多くの文人墨客達がたくさんの言葉を残したところである。『おくのほそ道』の旅の芭蕉がここを越えたのは青葉の頃だったが、作者は春霞の日に通ったのだろう。

●文学部部門

本の海 文字を釣ってる 夏休み

群馬県
林 楓 さん
群馬県立渋川女子高等学校2年

評・越前谷宏

青い海原に、小舟を漕ぎ出で、文字を釣る。空も、海も、時間も、全てが日常を離れてゆったりと流れている。健康的なけだるさといってもよい。まさに夏の昼下がりだ。こうした図書館もまた魅力的。

●想いでの修学旅行部門

東京の 日差しが痛い 夏の空

愛知県
岸 海渡 さん
刈谷市立依佐美中学校3年

評・茨木和生

「東京の日差しが痛い」という表現が一句を引き締めているが、なかでも「痛い」という言葉はインパクトがある。東京の夏らしさを端的に捉えている。

●大峯あきら 選

秋雨に 育英会の 手紙濡れ

兵庫県
黒岩 徳将 さん
ストックホルム大学4年

秋雨の降る日、育英会から来た手紙を受けとったのである。奨学生として採用されるかどうかについての通知なので、期待と同時に一抹の不安をもって、手紙を開くところ。秋雨に濡れたところを言ったので、その時の気持ちが正直に出ていて成功している。

●寺井谷子 選

制服着 くるぶし見えて 卒業す

兵庫県
古田 悠真 さん
川西市立清和台中学校3年

三年間着た制服。入学の時には少し大き目だったのに、卒業の今、ズボンの裾からくるぶしの靴下が覗いている。「卒業」というものを確りと捉えた一句である。

●ウルフ・スティーブン 選

The naptime my old dog takes getting longer

京都府　山本 貴之 さん　滋賀大学３年

飼い犬の加齢を見守る目は、歳を重ねる誰しもの、苦くも穏やかな一面を素直な事実として詠んでいる。少しずつ長くなる昼寝は、ものの哀れを思わせて、いつの日か永遠の眠りへと。

うと、祝福する気持ちで読みました。

大峯あきら　青春俳句大賞の作品の特徴は、何よりも大人の俳人達が失ってしまった感受性の新鮮さであり、これは宝物みたいである。しかし、全体的な印象を言えば、季語の使い方がやや大まかだということである。季語形式はわかりきったことであって、大事なのはこの形式のなかにいかにして若者らしい世界を盛るかだと考える人が多いが、この意見を詩の形式の生理というものに対する基本的な誤解である。一句のなかの季語が動くか動かないかということは、単なる技術論ではなく、俳句の本質論なのである。季語の選択に敏感になると諸君の俳句はもっと良くなる。

寺井谷子　毎年、今年はどのような作品に出会えるかと楽しみである。確実に各部門とも力をつけてきている実感がある。中学生から高校生、高校生から大学生となっても参加されている方、応募を勧めてくださっている教師の方々の力が集まってのものであろう。嬉しいことである。東日本大震災以後、「言葉」への関心が深くなったことも関わっているだろうか。さらに「言葉の力」を、「日本語の美しさ」を感じ、大切にして頂きたいと願っている。

ウルフ・スティーブン　コンテスト10年目の英語俳句は、さすがに磨きがかかっていました。英語そのものもネイティブスピーカーの作品を思わせ、即座に感動が湧き出ます。国際語としての英語と密接に暮らしておられるに違いない先生方のご指導により、生徒達のレベルは年々高まり、私は高校での模擬講義に出かけた際などに見聞きする生徒の言葉や態度にも、嬉しく驚かされます。俳句を詠むことが世界的な文化になりつつある今、里帰りした英語俳句が、日本文化の新しいジャンルにならないことを願っています。

卒業生が多しといえど、龍大の良いところと聞かれてこう答える人はなかなかいない。龍谷大学が浄土真宗の大学とも知らず入学した福島青年は、いつのまにか仏教にはまってしまう。

「西本願寺では朝の6時頃からお晨朝をやっていて、当時、僕は深草に住んでいたので、30分くらいかけて自転車で通っていました。経をあげて和讃をやって御文章の拝読を聞いて。観無量寿経とか、読んでいても気持ちいいんですよね、まだちょっと覚えてますよ（といきなり冒頭を唱えはじめる福島さん）」

仏教よりも没頭したのが落語だ。父親の影響で子どもの頃から落語にはまり、小学4年生で初めて買ったCDが6代目三遊亭圓生の『死神』。福島青年は迷わず落語研究会に入門し、『きぬ乃家じん丹』という芸名で落語やウクレレ漫談を披露していた。

「いつも頭のなかは寄席のことばかり。教室をいかに寄席小屋っぽくしようかと、授業中でもノートに図面を書いたりしていました」

漫談をやる傍ら、M-1グランプリ（吉本興業主催の漫才コンテスト）にも出演。プロの芸人達に混じって二度も準決勝までいったというのだから、お笑いの実力も相当なものである。

アナウンサー採用がない年に入社

小・中・高校と放送部、高校では演劇もやり、大学では落研。ずっと「話す」ことに関わってきた福島さん。アナウンサーになることを意識してもおかしくないようなものだが、そんなことは夢にも思わなかったという。しかし知らないうちに自然と、アナウンサーの英才教育を受けていたのかもしれない。

「僕は子どもの頃から『ラジオ深夜便』の大ファン。NHKラジオには有名なアナウンサーの方が大勢いらっしゃって、特に深夜枠の番組は、リタイアされた大御所の方がやっていることが多かったんです。だから超ベテランのテンポのゆったりとした、昔ながらの形のしゃべりを聞けるわけです。そういう技に非常に憧れていて、ずっと聞いていたんです」

そんな福島さんは修士2年生になると、できるだけ早く就職活動を終えて修士論文に取り組みたいという理由で、一番早い時期に就職試験のあったMBSを受け、合格してしまったのだ。ちなみに当時MBSは、3年間アナウンサーの採用をしておらず、福島さんも一般職として内定した。

それなのに「入社して一カ月経ったとき、突然面談で“アナウンサーをやらないか”と言われたんですよ。あのときは驚きましたね。でも腹のなかでは“よっしゃ！”ですよ。実際アナウンサーになってみれば、こんなにいい職業はないってくらい楽しいです」

やはり天は人の才を捨ててはおかない。一風変わったキャラクターは別として、辞書で語彙を養い、ラジオで大御所の語りを学んで育んできた才能は、人事の方も見逃さなかったのだろう。

アナウンサー史に名前を残したい

福島さんは、インターネットに押され、存在感が薄くなりつつあるラジオやテレビに興味があるという。

「落語をはじめ、雅楽や能など伝統芸能は消えていくかもしれないところが面白く、そこに執着する。仏教の教えとは正反対かもしれませんが、凡夫ですからね、我々は(笑)。そしてテレビも一つの時代をつくった一つの芸能。いつか『日本テレビ文化史大系10冊シリーズ』みたいなものができたときに、アナウンサー史っていう章があって、そこに一行でも自分の名前が残れば嬉しい。“俺が若いときにはテレビというものがあってね”と語れるような人になっていたいなと思います。でもやっぱりテレビやラジオが大好きなので残っていってほしいですけどね。僕はいろんなメディアが、並んで存在するという状態が良いと思うのです。ライフラインを一つに絞るのは怖いことですよね。それぞれのメディアがそれぞれの意識でプライドをもって情報を発信していくのが、本当の情報化社会だと思います」

弱みは“みんなの知っていることを知らない”こと

なんでもソツなく答える福島さんに、ご自身の強みはなんでしょうと聞くと、珍しくしばらく考え込んだ。

「うーん、見た目があまりスマートじゃないこと。コイツなら勝てると思わせて油断させる（笑）。強み、なんでしょうね？ 異なる世代の方や、自分と違う考えを持った方の気持ちを汲みとろうとする姿勢でしょうか。僕は子どもの頃からお年寄りと話すことが多かったですし、大学時代もお寺で近所の人と話すなど、違う世代の方と触れあうことがあたり前でした。落語でもお客さんの反応を見ながら、準備していたのとは別の話をしたりしますからね。だからそんな能力は磨かれたと思います。就職試験のときもマニュアルなんかに頼らずに、普段どおりの自分で接することができたのが良かったのでしょうね」

確かに福島さんの中継でのやりとりは面白い。アナウンサーが取材に来たというよりは、親戚が遊びにきたような感じで自然と現場にとけ込んでしまう。そんな福島さんであるが、意外に新人らしい悩みもある。器用になんでもこなしそうだと思われることが、逆にコンプレックスだというのだ。

「横文字は苦手だし、スポーツは全然やってこなかったので大いに知識が欠落しています。流行も気をつけて見るようにはしていますが、なにしろ興味が薄いので、どうでもいいことばかり覚えてしまうんですよね。人が知っている分野を知らなくて苦労することが多いです。人が知らない分野は強いのですけど（笑）」

苦手なことがいかにも福島さんらしくて微笑ましい。確かにアナウンサーが流行を知らなくては困るだろうけれど、世の中を斜に見た、ちょっとひねくれ者のアナウンサーが一人くらいいても面白いのでは。お茶の間の皆さんも、そんな福島さんを愛しているような気がしてならない。できればそのままのキャラクターでいてほしいと思うのは勝手だろうか。

愛すべき、ひねくれ者のアナウンサー

毎日放送（MBS）アナウンサー

福島（ふくしま）　暢啓（のぶひろ）さん

文学部日本語日本文学科2009年卒業
文学研究科日本語日本文学専攻修士課程2011年修了

“MBSが3年ぶりに採用した、期待の新人アナウンサー！”
そんなフレッシュな謳い文句に若干の違和感を感じる、七三分けにメガネのどこか懐かしい“お父さん”的風貌。落ち着きはらった語りは 25 歳とは思えぬ貫禄があり、しかも趣味は落語に昭和歌謡ときたもんだ。そんな福島アナウンサー、今やお茶の間では人気急上昇。1年目からMBSの人気番組『ちちんぷいぷい』や『知っとこ』を担当、その活躍ぶりも新人とは思えない福島さんだが、当初は全くアナウンサーになるつもりがなかったという。しかし話を聞くうちにわかってきたのは、“この人がアナウンサーにならずして誰がなるのか”というくらい、アナウンサー魂に溢れた人だということである。

幼少期の趣味は辞書を読むこと

幼少期から「ひねくれた性格だった」という福島さん。人と違うことをしたがる福島少年は、小学生の頃、同級生が児童書を読んでいるあいだ、ひとり辞書を読んでいた。

「初めに読んだのは家にあった広辞苑、中学で新明解。高校では和名類聚抄（わみょうるいじゅしょう）と平安時代に作られた辞書にはまっていました。辞書って読み出すと本当に面白いんですよ。一つの説明が短いので適当にパッとめくってそのページから読みはじめる。辞書のなかを散歩するように読んでいくのが好きでした。それでいつしか夢は辞書を編纂する人に。」

大学では日本語を学ぼうと思っていたところ、偶然みた龍谷大学のパンフレットに、『日本語日本文学科』と書いてあるのを発見し、「これだ！」と決めた。福島さんは宮崎の出身。通常九州の人は進学先に東京を選ぶ場合が多いが、京都を選ぶあたりがひねくれている。なんでも当時はアンチ東京だったとのこと。

仏教と落語漬けの学生時代

「龍谷大学に入って何が良かったって、そりゃもちろん西本願寺が近いことですよ」

このコーナーでは、様々な方面で活躍する「龍谷人」を紹介しています。在学生・卒業生で自薦・他薦を問いません。情報をお寄せください。

美しいだけではダメ。表現者としての豊かさも求められるモデルの仕事

ファッションモデル

遠藤（えんどう） 由香（ゆか）さん

文学部真宗学科2010年卒業

美しい。取材をしていてもついついじっと見とれてしまう、端正な顔立ち、華やかなオーラ。モデルだから綺麗であたりまえなのかもしれない。本物を目の前にすると“女神のような人ってほんとうにいるもんだなぁ”なんて心底、世の中って不公平だと思ってしまうのである。最先端のファッションをまとい、その魅力を身体で表現するファッションモデルは歩く芸術品だ。そんなモデル達が「いつかは立ってみたい」と憧れる舞台、パリ・コレクションからいきなり、モデル活動をスタートさせたのが遠藤由香さんだ。

モデルのイロハもわからぬまま、大学2年生で世界デビュー

遠藤さんがモデル業界の扉を開いたのは大学2年生の時。大阪の街を歩いていたら偶然、パリ・コレクションのモデルのオーディションを受けませんか、とスカウトされた。このショーは周知のとおり、翌年のファッション傾向を決定するともいわれる重要なショーであり、この舞台に立つことは世界中のプロモデル達の夢である。

「今ならパリ・コレクションに出ることがどれだけすごいことかわかりますが、当時はただの大学生。何も知らず「パリコレ」って聞いたことある!くらいの感じでした」。業界のイロハも知らず、受けるからには絶対受かりたいという、純粋な情熱だけで臨んだことが逆に良かったのか、遠藤さんは素人ながらこのオーディションでただ一人、パリ行きの切符を勝ち取った。2007年の12月26日に青山でオーディションを受け、3週間後にはパリへ、というスピード感。しかも初の海外渡航。モデルのなんたるかを学ぶ間もなく、まずは、パスポートの取得から。「家族もびっくり。騙されてるんじゃないか?って(笑)」

遠藤さんが出演することになったのは、エイメリック・フランソワという、当時パリで注目を集めていたオートクチュールの新鋭デザイナーのショーである。エイメリック氏はオーディションの映像を見て「彼女からはほかの誰よりもショーに出たいという気合いを感じた」と話したそうだ。

コレクション当日は文字通り、目の回るような出来事の連続だったという。驚いたことに、パリ・コレは当日に会場が変わることがままあるそうで、その時もスタート2時間前に会場変更を知り、慌てて駆けつけると通訳もおらず、英語で受けた説明はさっぱり理解できない。どこをどう歩けばいいのか、どんなポーズで、どうやって洋服を見せたら良いかもわからない。普通なら逃げ出したくなりそうなものであるが、そんななかでプロと並んでこの世界的なショーをこなしたというのだから、遠藤さんの度胸は並ではない。「緊張しすぎて、あんまり覚えていないんです（笑)。帰国してから3日間、40度近い熱が続いたくらい」

美しさだけではモデルになれない

パリから帰国した遠藤さんは現在の事務所に所属し、本格的にモデルの活動をスタートさせた。はじめは様々なトレーニングをおこなったという。美しくランウェイを歩くにはしなやかな足の筋肉が必要だ。10センチものハイヒールを履いて2時間歩き続けたり、さらには状況に合わせたポージング、表情など表現力の引き出しも多く持っていなくてはならない。美しいだけではモデルにはなれないのだ。「1回使ってみてダメだったら二度と声がかかりません。顔も身体も歩き方もしっかり鍛え、その1回を成功させるのがプロです。それができなければどんな輝かしい経歴があっても意味がない。パリ・コレクションに出たことは、私にとってはそれほどすごいという感覚がなくて。モデルを続けていく上で必要なのは、過去よりもこれからどう自分を磨いていくかです」

パリ・コレに出たことでむしろ周囲の目はより厳しくなり、通常の新人モデルにはないプレッシャーもあっただろう。遠藤さんの言葉には、それらの経験を乗り越えて、自分の力にしてきた強さが感じられた。プロのモデルになって4年目。「最近になってやっと、どの現場にいっても素の『遠藤由香』として入り込めるようになった気がします。それまでは“こうしなきゃ”って自分を作っていたんですね。余計な力がすっと抜けてからは、周りの人からも“良くなったね”と言ってもらえるようになりました」

つらい時に思い出すのは、学生時代の恩師の言葉

遠藤さんがつらい時などによく思い出す言葉があると言う。「モデルをしているとみんなに囲まれているようで、一人だなと思うことも多いんです。先輩も後輩も現場ではみんなライバル。仕事をする時は自分だけの勝負ですから、自分自身がしっかりしていないとダメ。そんなことがつらくなってきた時、ふと学生の頃、真宗学科の川添先生に“どんな小さなことも全てはつながっているんだよ”、とよく言われたことを思い出します。はじめてその言葉を聞いた時、なんだか強くなれたというか、心を大きく持てるような気がしました。それに先生は“学生時代にモデルという仕事に出会えたのは本当にすごいことだよ、そのために今までがあったのかもしれないね”と、何度も仰ってくださって。その言葉が今も背中を押してくれます」全てのことはつながっている。幼稚園の時からダンスを習っていた遠藤さんにとって、幼い頃から舞台に立つ楽しさは体に染み込んだものだった。また高校時代は陸上部に所属し、走り高跳びでインターハイに出場するほどの実力だったというから、パリ・コレでみせた本番の強さ・集中力は、遠藤さんがそれまでの人生のなかで培ってきたものなのだろう。そのどれもがつながって今の遠藤さんがいる。

「モデル以外の仕事はもうできないというくらい、今の仕事が好きです。もっともっといいモデルになりたい」感受性を高めたいと、忙しい日々を縫って休日は写真を撮ったりゴルフをしたり。油絵の道具も揃えてみた。普段の生活のなかで感情をていねいに持つことも仕事につながってくる。

「でもやっぱり一番の息抜きは、学生時代の友人に会うこと。モデルになる前からの私を知っている友人と会うと、ほっとする。とても貴重な存在です」

触れたら壊れてしまいそうな可憐な姿のこのミューズ（女神）は、しかし、しっかりと自分のことばを選び、芯の通った眼差しで自分自身について語ってくれた。その姿から見えてきたのは、見た目の美しさはもちろん、表現者としての精神の豊かさも求められる、華やかだが孤独で、奥の深いモデルの世界。この仕事を「天職」と言い切る遠藤さんは、これからもきっと、まさに身一つで、この世界を華麗に力強く歩いていくだろう。

龍谷人 このコーナーでは、様々な方面で活躍する「龍谷人」を紹介しています。在学生・卒業生で自薦・他薦を問いません。情報をお寄せください。

１年生の頃から大学生活は練習漬け。在学時にコンクール全国大会で金賞をとることはできなかったが、その後8回の金賞をとる強豪楽団への礎を築いた学年であり、良きライバルである仲間達と切磋琢磨し合う大学生活は楽しかった。しかしその仲間達も3年生の終わりになると、企業説明会に参加したりと次の進路を考え始めた。

「その時、本当に自分は何をやりたいのだろうかとかなり悩みました。そしてやっぱりこのまま楽器を続けたい、と素直に思ったんです。部のメンバーには楽器を続けようなんて考える人は一人もいませんでしたから、私が音大へ行きたいと言った時はみんなびっくりしていましたね」。それから1年間、音大受験をめざして、当時吹奏楽部のコーチをされていた京響の早坂宏明さんにレッスンを受け、楽典・聴音・ピアノなどを習い始める。一般的に普通大学から音大への受験は難しく、特に成人してからの聴音の勉強は厳しいといわれるが、櫻木さん本人は“そんなに大変でもなかった”という。目的達成のための努力は苦に感じないということなのかもしれないが、ある意味それ自体がすごい才能だ。かくして無事、京都市立芸術大学にトランペット専攻で進学。その時に櫻木さんはもう“プロになる”と心を決めていた。

運命の出会い、ヨーロッパへ

京都市立芸術大学では優秀な仲間に囲まれながら音楽の基礎を学び、充実した時間を過ごした。そんななか、あるコンサートで櫻木さんは運命的な出会いをする。その相手はベンクト・ダニエルソン。スウェーデン・イェーテボリ交響楽団の首席奏者であり、世界的なトランペッターである。

「ベンクトにレッスンをしてもらった時に、すぐさま“この人にもっと習いたい”と思いました。彼の人柄が滲み出るような、太くて澄んだ音に本当に感動したんです。クラシックの本場の空気に触れたいとの思いもあり、ベンクトが教鞭をとるイェーテボリ大学に留学することに決めました」

しかし、留学を1年後に控えた春、櫻木さんは大きな交通事故を起こす。前歯2本と下顎の骨折という負傷は、トランペット奏者としては致命的なものだった。3カ月の治療の後にトランペットを吹いてみると、音は全く出なかったという。音楽家生命が絶たれてもおかしくないなか櫻木さんはリハビリを続け、留学までには簡単な曲が吹けるところまで復活した。

吹奏楽部の若林先生は、櫻木さんを評して「心臓に毛が生えているのかと思うくらい動じない。コンクールの時でも全く緊張しているように見えなかった」と語っているが、この時も特に落ち込んだ様子もなく、留学をあきらめずに英語の勉強をしていたという。その精神力、その強さを持って櫻木さんはこの後の人生を切り拓いていく。

ドイツでの武者修行

「イェーテボリは刺激的な毎日で、音大生は2～３００円で定期演奏会のチケットを買うことができました。またプロのオーケストラ奏者と学生の距離が近くて、気軽にリハーサルを見に行ったり、レッスンを定期的に受けていました。“プロは遠い世界の人”という日本とは異なる、フレンドリーな環境です」

櫻木さんは1年の予定だった留学を２年に延長し、マスターを修了。さらにはドイツのケルン音大を受験し入学した。ここでは学生として学びながら、プロに混じって演奏をはじめる。学生の育成に熱心なドイツの楽団には、お給料をもらいながら、正規の団員とともに演奏活動をおこなう『プラクティカント』と呼ばれる実習生の制度がある。櫻木さんはドルトムント歌劇場の管弦楽団とフライブルクの放送交響楽団で、１年ずつプラクティカントを経験した。

「学生オケとは全くレベルが違うプロの楽団でレッスンを見てもらったり、一緒に演奏した経験はとても大きかった。ツアーも一緒に行き、スペイン、ベルリン、ブリュッセル、カナリア諸島などヨーロッパ各地を回りました。とても多忙な充実した日々でした」

オーディションを受けた数、20 回以上

プラクティカントとして所属する学生の毎日は忙しい。ツアーや日々の演奏の合間を縫ってオーディションを受け、次に所属する楽団のポジションを得なくてはならないのだ。

「どこでも入れたらいいという気持ちで、２０回以上オーディションを受けました。ドイツ、マレーシア、ロンドン、ポルトガル、北欧4カ国にオーディションを受けに行きました」

そんななか、縁があったのが北欧の名門、フィンランド放送交響楽団だった。現代曲、特にフィンランド出身の作曲家、シベリウスをよく演奏する楽団として地元の人々に愛されているオーケストラだ。櫻木さんは2度オーディションを受け、首席奏者ヨウコ・ハルヤンネの目に止まり２００９年から正規メンバーとしての入団が決まった。

「定年までいられる楽団は初めてなので感慨深かったですね。若い人から大ベテランまで幅広い年齢層がいる楽団で、経験豊富な同僚からは刺激を受けます。世界的に有名な指揮者やソリストも来るので毎回違って楽しいですよ」

才能という目に見えぬ武器だけで異国の地を渡っていくには、相当なタフネスが要求される。そこには幾多の困難もあったのだろうが、櫻木さんはつらかったことについては一言も語らなかった。その代わり、伝わってきたのは、彼女がトランペットがどうしようもなく好きだということである。楽団に所属して3年目、週に1度の演奏会のほか、地方遠征や海外ツアーにも出かけ充実した日々を過ごしている櫻木さん。今後はもっとプロフェッショナルを極め、どんな楽曲にも対応できる安定したプレイヤーをめざしたいという彼女の活躍が楽しみだ。なおフィンランド放送交響楽団の演奏はインターネットでも聞けるとのこと。遠い北欧の空のもと櫻木さんが奏でているのはどんな音色なのか、ぜひ耳を傾けてみてほしい。

北欧の名門・フィンランド放送交響楽団で活躍するトランペッター

社会的に顕著な業績をあげた卒業生に授与される『龍谷奨励賞』。昨年この賞を受賞したのは、難関で知られるフィンランド放送交響楽団のオーディションに受かり、日本人トランペッターとして欧州楽団の正規メンバーとなった櫻木厚子さんだ。龍大卒業後、京都市立芸術大学へ入学しその後欧州各地の楽団で演奏、その実力を磨いてきた。幼少期から音楽教育を受けていてもヨーロッパの一流オーケストラに入るのは非常に難しいとされる。大学から本格的に音楽を学んだ櫻木さんがこのオーディションを突破したのは、まさに快挙といえる。現ポジションを得るまでには様々な経験と並々ならぬ努力をしたはずであるが、その道のりはどんなものだったのだろうか。

フィンランド放送交響楽団

櫻木（さくらぎ） 厚子（あつこ）さん

経済学部経済学科2001年卒業

「音大に行きたい」にみんなびっくり

「トランペットはオーケストラの花形。目立つパートを任され、盛り上がりの部分ではみんなで頂点へ登っていくイメージ。そんな快感がトランペットの魅力です。かっこいいし吹いていて最高に楽しい楽器です」

櫻木さんがはじめてトランペットに触れたのは中学生の時。地元高知県の中学・高校で吹奏楽部に所属し、トランペットに魅せられた。大学でも続けたいと、吹奏楽コンクール全国大会の常連である龍谷大学へ進学する。その当時から龍大吹奏楽部の音楽監督は、元・京都市交響楽団（以降、京響）のトランペッター・若林義人先生だ。

このコーナーでは、様々な方面で活躍する「龍谷人」を紹介しています。在学生・卒業生で自薦・他薦を問いません。情報をお寄せください。

度重なる危機をともに乗り越えてきた社員達こそが、会社の財産

東洋シヤッター株式会社　代表取締役社長

岡田（おかだ）　敏夫（としお）さん

経営学部1986年卒業

リーマンショック以降、日本を襲った不景気の波のなかで、多くの企業がその姿を消した。そのなかで、一度は荒波をうけながらも粘り強くその帆を立て直し、進み続けている会社がある。東洋シヤッター株式会社。1955 年創業、大阪の南船場に本社を構える業界 3 位のシャッター専業メーカーである。その舵取りをしているのが本学卒業生の岡田社長だ。1986 年経営学部卒業。川鉄商事株式会社（現在の JFE 商事株式会社）を経て、1991 年東洋シヤッター株式会社入社。2010 年 4 月より代表取締役社長に就任した。岡田社長が歩んできた道のりと、厳しい時代を乗り越えるなかで学び取ってきた経営哲学とは。

予想外にハードだった大学のクラブ活動

学生時代の生活の中心はクラブ活動でした。龍谷大学は当時からバドミントン部が強いことで有名でしたが、私は気楽にクラブ活動をしたいと考え、同好会の方に入部したのです。しかし、それが全くの予想外で。なんとその同好会でもインターハイに出場した、なんていう強者が結構おられまして、一年生の最初の夏合宿の時点で「ハードな練習。こんなはずじゃ…」と(笑)。そんなスタートでしたがその後は副幹事長まで務め、結局4年間充実したクラブ生活でした。午前中は授業に、午後はクラブ活動、夜は下宿で仲間と麻雀、休みはバイトに明け暮れる。そんな当時の一般的な大学生の生活を送っていました。

その頃の同期との付き合いは今でも続いているんですよ。年に2回は飲み会をして、夏は家族ぐるみでキャンプへ。そこでは昔話よりも現在の子育てやお互いの生活の話に花が咲きます。お互いに歳をとり社会的な立場や役割は変わっても30年来の友人関係は変わらないし、彼らと過ごす時間は私にとって大切な息抜きの場です。

転職、そして経営危機を乗り越えて

大学を卒業する頃は、私の親父が東洋シヤッターの社長をしていたのですが、私は卒業すると当時の川鉄商事(現在のJFE商事)に入社しました。川鉄商事では建材部という部署で、鋼材の営業担当として働き「これは自分の天職だ、一生この会社でこの仕事を」と充実した時間を過ごしていました。ところが4年が経った頃、親父がどうしても東洋シヤッターに来いと言う。私自身、悩みに悩みましたね。父親が社長をしている会社に行くのですから、中途半端な気持ちではできません。実際、このままこの会社(川鉄商事)でがんばれという意見の諸先輩や仲間も多かったです。最終的には当時の私の恩人の言葉に背中を押されて、6年目に東洋シヤッターへ転職する決意をしました。

しかし、東洋シヤッターに入社して数年が経った平成11年頃のこと。会社の根底を揺るがすような問題が起こり、それまで隆々とやっていた会社が急転直下、経営危機に立たされました。それと時を同じくして病を患っていた親父が他界。それからは苦労の連続でしたね。私は当時取締役でしたが、再建の実務的な中心人物として、当然のことながら休日返上で毎晩夜中まで働きました。金融機関との折衝や再建計画を作成する傍ら、リストラの計画の策定と実行に追われる毎日で、今思えばみんながんばりましたね。会社がなくなれば従業員も路頭に迷う。それぞれが自分の生活基盤である会社を守るために必死でした。そんな甲斐があって平成18年には再建を終結でき、一段落ついたと思ったら、今度はリーマンショックです。業界全体でシャッターの需要が半分近くまで落ち込むという急激なマーケットの縮小に直面。体力がなかった当社はまたしても窮地に立たされました。

困難を乗り越えてきたからこその強み

その時に、社内の体制一新と思い切った若返りを図った方がいいということで、2010年4月に私が社長に就任することになりました。そこから今日まで盛りだくさんな道のりでしたね。大学の同期の仲間達もそれぞれの会社で苦労をしているみたいですが「岡田の苦労を考えたら、自分達はもっとがんばらなければ!」と、自らを奮い立たせる材料に使われていたみたいですね(笑)。社長になる前年・初年度と赤字、2年目にようやく黒字になり、今期はまずまず業績的には巡航速度で走っています。

今の当社の強みは500名弱の社員達。紆余曲折のなかでも会社に残り、本当につらい時期をともにしてきた仲間です。相撲に例えれば徳俵に足がかかり、もう後がないところまで追い込まれました。そこからの粘り強さはどこにも負けません。今ではなんとか俵から足が離れて土俵中央近くまで押し返してくれました。私はそんな社員やともに働く方々が当社の何よりの強みであり、財産だと思っています。ただこれからは、押し込まれたものを跳ね返す粘り強さだけでなく、自ら前へ前へと進んでいく推進力が必要な時期です。社員達によく話すのですが「風がやんだら止まるヨットではダメ。しっかりとエンジンをつけて向かい風でも横風でも突風でも巡航できる船にしなくてはいけない」そのためにも一人ひとりが強い社員となって、強くて温かい集団をつくり、環境に左右されない収益基盤をつくることが目下の経営課題です。

意外にも奥深い、シャッター

シャッターという商品は、家庭用ガレージのシャッターやビルの防犯シャッターなどをはじめ、一般の方にはあまり知られていない非常用の防火防煙シャッターなどもあります。これは火災が起こった時に延焼を防ぐためにシャッターで区画してしまうもので、ある一定以上の建物には建築基準法で設置が義務づけられています。非常に重要な防災設備の一つであり、我々も生活や財産を守る重要な製品を扱っているという使命を感じて仕事にあたっています。

また全てのシャッターは一つひとつオーダーメイドでつくる商品で、図面を描き工場で製造、施工まで見届け、故障や修理、点検業務も含めて一つの仕事になります。一件一件が受注商売ですから、定価がありマニュアル通りに売ればいいという営業と違い、高度な専門知識と経験が求められる仕事です。ですから社員を一人前に育てるのにも時間がかかりますが、逆に社員のがんばりやモチベーションの持ち方次第では大きく業績を伸ばすことも可能です。まさに人間力勝負なんです。ですから、社長として大切な役割は社員の気持ちに火をつけるような、リーダーシップを発揮することだと考えています。

「シャッターのことなら東洋シヤッターに任せておけば大丈夫」と思っていただけるような、専業メーカーならではの品揃えと知識を備えた会社にすることが私の使命。その道のりはまだ始まったばかりです。

寝言でも仕事のことを言うという岡田社長。ささやかな楽しみは、なんと自宅の模様替え。家で晩酌をしながら部屋を眺めては計画を立て、3カ月に一度はがらりと家具の配置を替える。ご家族は大変だと思うが、岡田社長の愛嬌あるお人柄が滲み出るエピソードだ。会社を、従業員を守るために、東洋シヤッターを逆風にも負けない戦艦に育てていく、そんな岡田社長の挑戦はこれからも粘り強く続く。

このコーナーでは、様々な方面で活躍する「龍谷人」を紹介しています。在学生・卒業生で自薦・他薦を問いません。情報をお寄せください。

BOOKS

◆ 共同研究活動 ◆

龍谷大学国際社会文化研究所叢書13

『日中韓の戦後メディア史』

李 相哲（社会学部教授）編者、卓 南生（龍谷大学名誉教授）、
西村 敏雄（龍谷大学元教授）、西倉 一喜（法学部教授）

この本は、日中韓3国のジャーナリズム現場で活躍するジャーナリスト、メディア研究者が断続的に一堂に集まり意見を交わしながら、各々の現場で感じたこと、得られた知見を論文の形にまとめたものである。本書の最大の特徴は、現場を知るジャーナリストと研究畑を歩んできた研究者とのコラボレーションによってでき上がった作品であるというところにある。

2012年12月刊／324頁／藤原書店／3990円

龍谷大学国際社会文化研究叢書12

『日本の大学評価―歴史・現状・評価文化―』

細川 孝（経営学部教授）編著、角岡 賢一（経営学部教授）、
重本 直利（経営学部教授）著者

本書は、執筆者達が取り組んだ国際社会文化研究所の指定研究（2007～2009年度）の成果である。2004年、国立大学の法人化、認証評価の導入によって、日本の大学評価は新たな段階に入った。そのような背景のなかで、本書は、日本の大学評価を学問的に検討しようと試みたものである。類書には見られない考察や問題提起が含まれている。

2012年9月刊／209頁／晃洋書房／2520円

◆ みんなの本棚 ◆

『お手々つないでみな帰ろ』

越智 宣章
（1954年文学部哲学科卒業／元読売新聞記者／奈良県）著者

「夕焼け小焼け」で始まる有名な童謡は大正12年に発表された国民唱歌であり、仏教賛歌であると述べられ、読後温かく且つ爽やかな珠玉の短篇。

2012年9月刊／46頁／探求社／520円

『大谷探検隊研究の新たな地平』

白須 淨眞
（1974年大学院文学研究科東洋史学専攻修士課程修了／
広島大学大学院教育学研究科准教授／島根県）著者

外務省に、大谷探検隊に係わる外交記録が数多く保管されていました。従来まったく知られることのなかった新資料による大谷隊の新研究です。

2012年8月刊／422頁／勉誠出版／8400円

『われも六字のうちにこそ住め』

西光 義秀（1979年文学部社会学科卒業／著者）

人間はみんな一度きりでかつ初めての人生を生きている。前を歩いた先人の足跡を尋ねて自分はどう生きるべきかを明快に教えてくれる。

2012年11月刊／235頁／樹心社／2100円

『奪われた信号旗』

指方 恭一郎
（1985年文学部仏教学科真宗学専攻卒業／
西教寺副住職・園長／福岡県）著者

シリーズ4作目。外国船の長崎入港を報せる信号旗が何者かに奪われた。捜査する長崎奉行所与力伊立重蔵に小倉藩と福岡藩の影が……。

2012年10月刊／245頁／文藝春秋／610円

『動じない心』

宮城 泰年（1954年文学部文学科卒業／著者）

山伏の総本山・聖護院の門主であり、本山修験宗管長が語る「自在に動く心」で「受け容れる心」になる事について現代的に解りやすく説く。

2012年12月刊／199頁／講談社／1575円

『江戸の仇』

指方 恭一郎
（1985年文学部仏教学科真宗学専攻卒業／
西教寺副住職・園長／福岡県）著者

シリーズ5作目。伊立重蔵が太刀の刃を落とした理由が明らかとなる。オランダ人や唐人も参加する武芸仕合において復讐の幕が切って落とされた。

2013年1月刊／270頁／文藝春秋／620円

『精神障害者の生活支援―障害年金に着眼した協働的支援』

青木 聖久
（2012年社会学研究科社会福祉学専攻博士後期課程修了／
日本福祉大学教授／愛知県）著者

精神障害者が社会の差別や偏見に翻弄されずに、等身大で暮らすためには…。本書は障害年金の活用を通して、精神障害者の生活支援に力強く迫る。

2013年1月刊／264頁／法律文化社／2415円

中田 邦博（法科大学院教授）共著
近時問題となっている集団的訴訟による消費者被害救済の法理を比較法的に解明した貴重な論文集。
2012年8月刊／423頁／Cambridge University Press／95ユーロ

『ひつじ意味論講座：意味とコンテクスト』
東森 勲（文学部教授）共著
意味理解においてコンテクストがいかに重要かということが論じられています。直示表現、関連性理論によるジョークの理解などが取り上げられています。
2012年11月刊／217頁／ひつじ書房／3360円

『『教行信証の研究』の研究（全四巻）』
葛野 洋明（文学部特任教授）、中平 了悟（非常勤講師）、西 義人（非常勤講師）、藤丸 智雄（非常勤講師）共著
『教行信証』を座右におき、私達念仏者一人ひとりが、時代や社会を切り拓いていくための立脚点を確かなものにーとの願いから刊行した本書。
2012年8月刊／浄土真宗本願寺派総合研究所／21000円

『アメリカン・カルチュラル・スタディーズ（第二版）：ポスト9・11からみるアメリカ文化』
藤本 雅樹（文学部教授）翻訳、共著
今なお現在進行形であり続けるアメリカという名の壮大なるテクストを、その文化の諸相から解読した、アメリカ文化研究の入門書。
2012年11月刊／272頁／萌書房／3150円

『はじめて学ぶ健康・スポーツ科学シリーズ スポーツ生理学』
河合 美香（法学部准教授）共著
スポーツ・健康科学を学ぶ学生を対象に、基礎的な内容を広く豊富に含んだ教科書シリーズ。専門を効率良く修得できるように構成されている。
2013年1月刊／224頁／化学同人／2730円

『半導体デバイス工学』
木村 睦（理工学部教授）共著
現代及び将来のエレクトロニクス社会を根底から支える半導体デバイスを、基礎から応用まで詳しく説明した、未来の技術者を対象とした教科書。
2012年9月刊／213頁／オーム社／2730円

『会社法にみる法人役員の責任』
今川 嘉文（法学部教授）著者
会社法適用会社、一般社団財団法人、社会福祉法人、医療法人、学校法人、NPO法人、宗教法人、LLPなどの役員責任を分析。
2012年10月刊／591頁／日本加版出版／5565円

『構造物のシステム制御』
大住 晃（非常勤講師）著者
風や地震などの外乱をうける構造物の制御問題をシステム制御理論の立場から論じた著書。例題を多く含むので入門書として最適。
2013年1月刊／260頁／森北出版／4725円

『「地域主権改革」と自治体の課題』
本多 滝夫（法務研究科教授）共著
本書は、2011年4月、8月に相次いで成立した地域主権一括法による「義務付け、枠付けの見通し」などが自治体に及ぼす影響とその課題を明らかにしている。
2012年10月刊／163頁／自治体研究社／1890円

『「陰徳の豪商」の救貧思想―江戸時代のフィランソロピー―』
大塩 まゆみ（社会学部教授）著者
江戸時代の豪商達が〝陰徳〟という思想のもとに困窮者を救済していた史実を内田家の史料から発掘し、陰徳思想のルーツを探るとともに富豪道に言及した。
2012年10月刊／229頁／ミネルヴァ書房／3675円

『ジョウゼフ・コンラッド―比較文学的研究と作品研究』
松村 敏彦（非常勤講師）著者
本書は、ポストコロニアルの問題のみならず、現代の地球的規模の環境問題にも有効な哲学的基礎を提供するコンラッドの思想を比較文学的に論じている。
2012年11月刊／320頁／大阪教育図書／3885円

『現代社会学辞典』
亀山 佳明（社会学部教授）、黒田 浩一郎（社会学部教授）共著
『社会学辞典』の精神を継承し、その出版から24年目に、その間の社会変容を捉える事項を加えて、21世紀を生きるのに必要な叡知を志して出版。
2012年12月刊／1590頁／弘文堂／19950円

『差別の境界をゆく―生活世界のエスノグラフィー―』
岸 衛（社会学部非常勤講師）共著
20年にわたって滋賀県内の被差別部落を訪れ、人びとから聞いたライフストーリーを描き出した。人びとのリアルな息遣いを描いたエスノグラフィー。
2012年10月／239頁／せいか書房／2300円

『ソーシャルワーカー論研究―人間学的考察―』
清水 隆則（社会学部教授）著者
政策論や技術論に依存するのではなく、むしろそれらを包含する形でソーシャルワーカー論を体系化する試み。ワーカーの存在論から現象学に及ぶ。
2012年12月刊／254頁／川島書店／3150円

『DVDでわかる家族面接のコツ②家族合同面接編』
東 豊（文学部教授）著者
システムズアプローチによる家族面接（家族療法）の進め方を模擬面接のDVDと逐語録の解説から学ぶ。その第2巻は「4人家族」との2回分の面接。
2013年1月刊／160頁／遠見書房／6930円

『かぐや姫と絵巻の世界 一冊で読む竹取物語 訳注付』
安藤 徹（文学部教授）共編
『竹取物語』の古本系の「新井本」を底本とした注訳書で、同本の現代語訳は初。江戸期の絵巻をフルカラーで収載し、詞書の翻刻なども付す。
2012年10月刊／216頁／武蔵野書院／1575円

『アメリカのコミュニティ開発～都市再生ファイナンスの新局面』
矢作 弘（政策学部教授）著者・編者
米国の都市問題は貧困の解決が主要な課題である。財政が緊縮化し政府の都市再生支援が細る状況下、コミュニティ活性を促す多様な地域金融が生まれている。
2012年10月刊／315頁／ミネルヴァ書房／3675円

『シリーズ大乗仏教 第7巻 唯識と瑜伽行』
桂 紹隆（文学部特任教授）編者
中観派と並ぶインド大乗仏教の一大流派・瑜伽行唯識派の思想を理論と実践の側面から歴史的に辿り、中国における展開にも言及する。
2012年8月刊／290頁／春秋社／2940円

『新・コンメンタール民法（財産法）』
中田 邦博（法科大学院教授）編共著、川角 由和（法科大学院教授）、若林 三奈（法学部教授）共著
民法（財産法）について近時の民法解釈学の動向を踏まえ重要判例・関連法令も取り込んでコンパクトに解説した最新注釈書。
2012年9月刊／1125頁／日本評論社／6825円

『Stefan wrbka and et.(ed), Collective Actions』

『水俣学講義（第5集）』
丸山 徳次（文学部教授）共著
熊本学園大学で展開されている水俣学講義の第5集。花田昌宣・原田正純の編集。「水俣病の〈責任〉と〈教訓〉」（丸山徳次）はその第4回講義。
2012年8月刊／332頁／日本評論社／3960円

『新・アメリカ商事判例研究（第2巻）』
今川 嘉文（法学部教授）共著 米国法研究
2012年8月刊／380頁／商事法務／4200円

『明解企業史研究資料集―旧外地企業編 全4巻』
佐々木 淳（経済学部教授）編者
本資料集は、日本有数の企業資料コレクション「長尾文庫」（本学深草図書館所蔵）から旧外地企業関連の資料を蒐集し、復刻したものである。
2012年9月刊／3341頁／クロスカルチャー出版／157500円

『もしマルクスがドラッカーを読んだら資本主義をどうマネジメントするだろう』
重本 直利（経営学部教授）著者
経済競争的から社会共生的なマネジメントへの転換の可能性を、ドラッカーをはじめとした経営学とマルクスの社会主義像をつなげることで見い出す。
2012年12月刊／191頁／かもがわ出版／1995円

『民事訴訟法［第7版］』
松本 博之（法学部教授）共著
民事訴訟法の体系書であり、国際裁判管轄の新規律を体系的に叙述し、外国判決の承認についても1節を設けて詳しく解説した最新版。
2012年11月刊／937頁／弘文堂／6300円

『生き方死にかた―僧侶ドクターの人生カルテ―』
友久 久雄（文学部教授）著者
心配しながらビールを飲むよりおいしく飲むほうがよい…私の好きな言葉は「ありのまま、そのまま」です。無理に頑張らず考え過ぎず（本文より）」
2013年2月刊／143頁／本願寺出版社／840円

社会学部長

しらいし　まさひさ
白石　正久 教授

任期：2013.4.1～2015.3.31

2008年に社会学部に着任。特別支援教育の内容と方法、発達障害の法則的認識を主たるテーマとして、研究・教育に携わっております。瀬田キャンパスのある大津市の南東丘陵は、戦後の荒廃のなかで糸賀一雄らが障害児施設「近江学園」を開き、「この子らを世の光に」と述べた発達保障の思想の胎動の地です。全ての生命は自己実現へのたたかいのなかにあり、その姿によって互いに力を与えあう「光」になるのだとするこの思想は、自らの存在の価値とは何かを模索しつつ私達のもとに集う学生達といかに向きあうべきかを示唆してくれるようです。社会学部が積み上げてきた教学の財産が、この地ならではの教育・研究としていっそう根づいていくために、構成員の力が総体として生かされる粘り強い学部運営を心掛けていきたいと思っております。

文学部長

えちぜんや　ひろし
越前谷　宏 教授

任期：2013.4.1～2015.3.31

1992年に文学部に着任。教務主任、入試部長を歴任。文学部長は2期目となります。専門は日本近代文学、特に昭和期の文学を研究課題としています。

1期目は、臨床心理学科を船出させ、初年次教育とキャリア教育の充実を図りました。また、学部としてアカデミック・リテラシー教育の再構築にも取り組んで参りました。2期目となる今期は、1期目の取り組みの検証をおこないながらさらなる改善を図り、また、学びのスタイルの変化に対応して学生自らが主体的に学べるよう、アクティブ・ラーニングの促進に努めたいと思っております。「社会人基礎力」を身につけた学生を養成していきます。

短期大学部長

ふじわら　なおひと
藤原　直仁 教授

任期：2013.4.1～2015.3.31

専門は心理学。生理心理学の領域から、ヒトの注意機能の分析などを研究課題としてきた。学内では、研究主任、教務主任、大学評議員を歴任し、学部長３期目。

「2012 年度、短期大学部ではこども教育学科、社会福祉学科教養福祉コースで初めての卒業生を送り出しました。こうした状況を踏まえ、2013 年度からは社会福祉学科社会福祉コースを含む、「りゅうたん」全体の充実に向けた改革を進めるための具体的方策の立案、実施を積み上げていきたいと思います」と３期目に向けた抱負を語り、短期大学部の新たな発展をめざす。

経営学部長

のまけいすけ
野間　圭介 教授

任期：2013.4.1～2015.3.31

1991年度経営学部に着任、以来勤続23年目。専門分野は経営情報システム。日本経営情報学会理事。学内では、1997年度から２年間学部学生生活主任、2006年度から２年間研究科教務主任、2008年度から３年間入試部長、2012年度評議員。

経営学は利潤追求だけでなく、組織をいかにマネジメントするかを探求する学問です。一方、製造の国際的分業、取引の電子化（e-コマース）、企業の社会的責任、持続可能な社会など様変わりする環境のなかで、新たなビジネスモデルが登場して、経営に対する考え方が大きく変わろうとしています。既成概念にとらわれることなく大学運営、学部運営に取り組みたいと思っています。

実践真宗学研究科長

たつだに　あきお
龍溪　章雄 教授

任期：2013.4.1～2015.3.31

1985年に短期大学部に着任、2004年文学部に移籍。学生生活主任、研究主任、大学評議員などを歴任。専門は近代真宗教学史、とくに「近代真宗学成立史」を研究課題としています。2009年度に開設された実践真宗学研究科から、まもなく第2期生が巣立ちます。産声をあげてからまだ日の浅い本研究科にとって、修了生の活躍は本研究科の評価に直結するとの認識のもと、真宗の教義を基礎とし21世紀社会の諸問題に対応できる、高度な実践能力をもつ宗教的実践者を養成していきたいと思います。そのために、他の関係する機関などとの連携をも視野に入れつつ、カリキュラムのさらなる充実に努めたいと考えています。

政策学部長

いしだ　とおる
石田　徹 教授

任期：2013.4.1～2015.3.31

1979 年度に法学部に着任。2011 年度に政策学部へ移籍。法学部時代には、法学研究科長、法学部長、教学部長、研究部長を、政策学部へ移籍後は政策学研究科長、地域公共人材・政策開発リサーチセンター長を歴任。専門は政治学、福祉・雇用政策研究です。政策学部は、2011 年度に開設されたばかりの新しい学部です。グローバルな視野を持ちつつ地域の課題を解決できる人材を育てていきたいと考えています。文部科学省・大学間連携共同教育推進事業「地域資格制度による組織的な大学地域連携の構築と教育の現代化」の代表校として京都における９大学の先頭になって地域のセンターとしての大学づくりをめざしたいと思います。

法科大学院長

いしづか　しんいち
石塚　伸一 教授

任期：2013.4.1～2015.3.31

1998年に龍谷大学法学部に着任しました。前任校は北九州市立大学法学部、専門は刑事学（犯罪学と刑事政策）、主著に『社会的法治国家と刑事立法政策』（深山社）、『刑事政策のパラダイム転換～市民の、市民による、市民のための刑事政策～』（現代人文社）、編著『日本版ドラッグ・コート～処罰から治療へ～』（日本評論社）などがあります。本学には、伝統のある特別研修講座「矯正・保護課程」を盛り上げるつもりで移籍してきました。2005年度の文科省学術高度化推進事業（AFC）「矯正・保護研究センター」の立ち上げに関与し、副センター長を務めました。2005年の法科大学院開設にかかわり、刑法、刑事政策、刑事実務総合演習などを担当しています。現在は、弁護士登録をして「市民のために働く法律家」の理論と実践をめざしています。

理工学部長

おおやなぎ　まんし
大柳　満之 教授

任期：2013.4.1～2015.3.31

1989 年理工学部開設と同時に着任。これまで学長補佐、REC センター長、評議員や研究主任、学生生活主任を歴任。学部長・研究科長は3期目となります。専門分野は無機材料化学です。学部・研究科を通して、国際水準の教育課程構築に向けた教育改革を推進していきたいと考えております。高い倫理観を備え、グローバルな視点でものごとを捉えることができる理工系人材を育成したい、というのが抱負です。また、文部科学省の補助事業（平成24年度-26年度）に採択され、シリコンバレーなどでのグローバルインターンシップも展開しております。理工学部・研究科のさらなる発展に期待してください。

龍谷 2013 No.75

読者のひろば

文学部 1 年生の保護者です。中学・高校とクラブ活動に明け暮れた娘が大学生になって 1 年。日に日に“ 人間力 ”が向上していくように見えます。広報誌「龍谷」を拝読し、その理由が少しわかるような気がします。 (学生保護者K)

○●○

子どもが初めて一人暮らしを始め、親としても不安だらけですが、毎回広報誌を送っていただき大学の様子が分かります。今後もいろいろな情報を発信して下さい。 (学生保護者G)

○●○

広報誌「龍谷」を拝読させていただく度に、息子は本当に良い大学を卒業でき、おかげで自分の希望する会社に入ることができたのだと感じています。

(2011年卒業生保護者Y)

○●○

定期的に送っていただく広報誌「龍谷」ですが、正直いつも母しか読んでいませんでした。ふとしたことをきっかけに私も初めて読んだのですが、世界で活躍する卒業生の方々を知り、励みになりました。私もがんばろうと思います。

(2011年卒業生K)

●お便り待っています。

「読者のひろば」へのお便りをお待ちしています。
また、「龍谷人」などへの推薦や情報をお寄せください。
いずれも以下のあて先まで。

《プレゼント・お便りのあて先》

龍谷大学 学長室（広報）

〒612-8577　京都市伏見区深草塚本町67
Tel：075（645）7882
Fax：075（645）8692
E-mail：kouhou@ad.ryukoku.ac.jp

編集委員 新井 潤、泉 文明、市川 良文、太田 由記子、岡本 健資、芝原 正紀、進藤 弘樹、竹村 光世、田中 正清、築地 達郎、中尾 覚、中野 浩、西田 裕介、畠山 亮、羽溪 了、藤原 直仁、増田 省三、水野 哲八、三谷 進(50音順)
事 務 局 藤井彰二、室矢直人、鈴木隆文

広報誌「龍谷」75号
2013年3月発行

編　集：龍谷大学編集委員会
制　作：龍谷大学学長室（広報）
発　行：龍谷大学

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
電話　075(642)1111（代表）

龍谷大学ホームページURL
http://www.ryukoku.ac.jp

●広報誌「龍谷」からプレゼント！

龍谷ミュージアムペア招待券 ……10組20名様

ご希望の方は、住所・氏名・年齢・職業・電話番号（龍谷大学関係者は卒業年度・学部なども）及び広報誌「龍谷」の感想・意見、あなたの近況などを書き添えてご応募ください。感想や近況は「読者のひろば」に掲載させていただくことがあります。あて先は左記「プレゼント」係まで。
締め切りは5月31日（金）必着。
応募多数の場合は抽選で。当選者の発表は、発送をもって代えさせていただきます。

龍谷大学教育研究施設設備等整備資金の寄付金ご協力のお願い

龍谷大学では、第５次長期計画のもと、「龍谷大学教育研究施設設備等整備資金」の募集に取り組んでいます。この寄付金を教育・研究の基礎となる施設・設備の整備に充てさせていただきたく、任意ではございますが寄付金募集のご理解・ご協力を賜りますようお願いいたします。お問い合わせについては、龍谷大学財務部経理課までお願いいたします。

＜お問い合わせ　龍谷大学財務部経理課＞
住所　〒612-8577　京都市伏見区深草塚本町 67
TEL　075-645-7876　　FAX　075-643-9111
E-mail　keiri@ad.ryukoku.ac.jp

広報誌『龍谷』75号　読者アンケートのお願い

今後のより良い広報誌づくりのため、
同封のアンケートにて皆様のご意見をお聞かせください。

なお、アンケートは、
https://www.ryukoku.ac.jp/enquete/
からも回答していただけます。

龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY